

ユ リ イ カ
Eureka,

エ ク ス タ シ ス
青龍 *ékotais;*

しぶやりゅーこー

.+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β'' .+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β'' .+:。ooo。。

(*艸\$)!

あ t=U のぷろフ t=" おー(∀)!

トも t=" ちわ (ゝ艸・○)*:.。 ☆..。

ゆ L1 汰ノ い U のツリや t=あソ(ω)

こんぐら L1 カな(◆、V°)/*.

どω②絡ωでくでるト嬉 UL1 でつ(*●艸∀<\$)◆◇

L1 ツぱ L1 t=いツ U 乙ルカラ(° 艸 °)

Σ(Pq ⊃ Δ ∫ o○*)*° / 〰 ★〃

乙カ 絡み矯正だヨ *藁(*凹 Qωo 艸*)◆

柿仔ヨロ d・3°)◆。+

ス t=あ-ト、(\$∀)a

.+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β'' .+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β'' .+:。ooo。。

つーか、バス停で、ほんやり。^{知らず}いだれかの『ぷろフ』。ケータイでこれ見てた。
R a p が耳に、i P O D n a n o .

イミなんて、^{ムミカン}無味乾燥。
字のられつ? いみナイ。

トカゲの皮膚ちゃん。
ひび乾いた、カラカラの。
リアる...

テか、
バスが
~~あ~~たしの
マエに、
とまっ
た、
っ
っ
うー
コト
だ
おー。
。

Eureka, 青龍 *έκστασις*; 1

Act 1.

As Of Now ⇆ Reality is only interpretation ⇆

メンドクせー…………

見^みなきや、イーとか、説^{せつとくりよく}得力ねーカラ。

バカじゃね？　夕^{せつとくりよく}かれたコトねーやつのセリフ。説^{せつとくりよく}得力ねーから。サイトで、たたかれてカラ、エラソーに説^{せつきよう}教しろ、っーの。

見^みナイことはできるケド、氣^きにシないコト、できねーんだから、同^{おな}じじゃなくね？

あーあ、死^しんぢやいテーなあ（笑）。

てか、タッチパネルを、タップして、スクロール。

AN^あKA^んちゃんのホムペ、ひらく。ブログ、見^みる。

彼女^{かのじよ}のコト、ぜんぜん、知^しんねー。ケド、好^すき♡

ほんとーに、女^{おんな}の子^こか、どおーかも、わかんねー、ネカマかも、だケド、どおダツて、いーよ。あたまいーいから、スキ。いちおー、

14 サイで、中^{ちゆう}2で、あたしと同^{おな}じだあー。

「おはゆー♪

みゆち、元氣してるん？

月曜、ガッコ、メンドいネー

わたり、11マ起きたわ？

ちよーフツれて病^{ちゆう}んでルよー

12/11 7:09 「

そーそー。

ナンでさ、モテる女^{おんな}と、モテねー女^{おんな}ってのが、あるワケ？　ちよームカつくんだけど。

ンなこといつでも、しょーがない。それが、ゲンジツ。はあ。

不公平^{ふこうへい}じゃなくね？

差別^{さべつ}じゃん。差別^{さべつ}だおね？

ヨゐ人^{ひと}で、日^ひごろ、ただしいコトしてても、彼^{かれし}氏^しできるわけじゃ

ねーし。意味ナイじゃん、正義っーモン。

だいたイ、魅力☆って、なんなの？

微笑みをたやさず、あかるく、ポジティブなら、男の子にわ、みりょくある女、っっーわけでもねーし。

あー、うぜー。

そーダトしても、生まれつきそおゆう性格じゃないコは、生まれつきそおーゆ性格の子にくらべて、2バイ努力が、ひっよーで、不公平じゃなくね？

ダルいことゆわれたくないから、さきにゅーケドさー、こごい不公平だよ。

人間って、ぜったい、平等になれナイ。

こーゆーと、平等ッテ意味わ、そーゆーコトじゃナインだよねーとか、めんどくせーコトゆわれるケド、んなのクレイゴトにしか、きこえねーカラ。

現実に不平等を感じてンダカラ、不平等ナンだよ。ナノに、ぢやナイ、ゆわれたっテ、うっぜーよ、それが実存だろーがよ！

実存は、本質に先行すんだろ？
ヒガみだお。

わりーか？

ッかねーの力よ、つか、

ナンデ、んな、めんどくせールールなわけ？ やってらんねーし。
グダグダいってゐるあいだに、ガッコ着いた。

校門、すごく高くそびえて見える。

イスラエルの民が見た、バビロンのイシュタル門みたいに。

っーか、地獄門みたいに見える。

2 あたし in 人気サイト REAL WORLD

ガッコー、やっと終わった。ホッ あたし、遠距離通学ナンデ、帰りは、いつも独り夕方。帰り通って、ナンか素になる。冬の夕日、

カナシイ、とか。

ANKAのこととかが、ヒトゴトじゃなくなったのわ、昨日カラ。

コウキくん……あーあ。

トモダチから、彼のアドきいたところまでは、ヨかったんだよなー。

メール「きゅーに」メン。ユリイカだよ。きいてもらエルだけでいいんだ。

お願いします……」って、よび出した。ケド、会ったら……

「カンちがいすんなよ。キョーミねーカラ、オレ」

スゲー。まち？ いきなりかよ。話くらい、きいてくんナイの？

あたし、ガクゼン。フラれるかも、とわおもってたけどさー。

最アクだよ。ドンナ顔して、ガッコ来ればいいのよおー、って、

おもいながらも、今日来たけどさー。休みたかったおー。

授業なんか、いつナニが、終わったか、おぼえてねー。終業のチ

ヤムも気がつかなかった。

ただ、オートマチックにしたくして、教室出たダケ。記憶ナシ。

帰り道も、ナンも、見えテなかった。正門出てから、バス乗って、

電車に乗って、また、バス乗って、降りたはずなんダケド、とちゅ

ーの風景も、ナンも、見えてナかった。

もー、わすれよー。それっきやねーよ。ハア

ケータイ片手で、ボーっと、サイト見ル。……タタきのレスふえ

てるし。どーせ、あたしやー、性格わりーし、ブサイクだお。だか

ら、モテねーんだよ。

とーとつに、激情に、襲われた。コイツらの家のドア突きやぶッ

テ、ガソリンまいて、焔いつケテ、大笑いシテヤリタイ（笑）。

ドす黒イ噴煙みたく、嵐の雲のよーナ、凄まじイ怒気が、逆流シ

テ、あたまのてっぺん、やぶッテ、噴き上がる。

涙が、あふれそーになった。

ナンデ、こんなに哀しいのに、このあたしを、タタクのよ？ 酷

すぎジャンくわ。

ヒドイよーっ！

ナミダこらえて、街を、なんモカンも、ぶちこわしたイきぶんで、

歩^{ある}いているうちに、どうにもなんナイ、現実^{げんじつ}のせいで、やがて、シリアスナ、きぶんに、なつてくる。家^{うち}に着^つく。

がちゃ！ ハッ！

玄関^{げんかん}に、靴^{くつ}、脱^ぬぎすてる。

「おかえりなさい」

あたし、ムシして、階段^{かいだん}を、上^あがる。

「クリームサンド、買^かつておいたから」

「イラねー」

2階^{かい}にあるじぶんの部屋^{へや}の鍵^{かぎ}しめて、号泣^{ごうきゅう}した。クダラねー。ゼンブくだラねー。

「ユリイカちゃん、ご飯^{はん}よ」

ムリっ！ あんたら、幸^{しあわ}せで、ナンも、わかっちゃいねー。あの^{ひと}人^{ひと}たちにや、なんも、わからねーよ。

あたし、独^{ひと}りダ……………

ともだちも、恋^{こい}も、ギャルも、ムナシイな。

0時^{れいじ}くらい、ケータイを、手^てにした。

ANKAちゃんに、ナンカ、書^かきこもーカナ、っておもって……このままじゃ、ちょーまちやばいし。

ホムペ、ひらく。

新^{あた}しい書^かきコみが、あつた。

カノジヨの。

「ダレカ、わたしといっしょにいこ

りあるに叛^{ソム}コーうよ

ダルすぎル

ぢやなくナイ？

わたし、あたら^{わー}り世界に

ふみこモーとひてんだあ

12/11 11:23 ー

あたし、そッコー、レスして、

「イミフ

それッテ、ドコ？

あたし、いきたーい

ふうれタあー（笑）

12/12 0:11 ー

すぐに、ANKAの、書^かきこみが、

「いいヨ

ツれてツテあげル

モバゲーぢやない

ソの百^{ひやくまんばい}萬倍すこいよ

<http://www.realworld.com>

來^きなさい

12/12 0:54 ー

モバゲーじゃナイ、って、どーゆーコト？

っーか、あたし、モバゲーの、きぶんじゃないんだケド……

「でも、ANKAちゃんを信^{しん}じよお。ほかに、選^{せん}択肢、ねーし」

あたし、ま^りあ^るで現^り実^{ある}へ、復^{ふく}讐^{しゆう}しタイ。りあるを、コ^ろロしたい。

貼^はってあ^ったUR^んに、ア^クセ^ス。サ^イト^が、立^たち上^あが^った。

へえー、こんなの、あるンだあ……

ま^ばゆい 虹^{レインボ}カラーや、プ^ラテ^イナや、ゴ^ール^ドの、つ^ぶつ^ぶが、

チ^ラチ^ラゆ^れな^がら、き^らめ^く背^{はいけい}景^{けい}。

ふしぎな音楽が、ながれテルウ…………

REAL WORLD だって…………。りある・わぁーるど？ 外国のサ

イト？　なんか、キンチョーするおー。しつかりしよお。まぢに、
なんなくつちやつ！

ENTRE の文字が、あつた。あたし、タップする。

ID とパスワードの、入力画面が、立ち上がる。

新規のばあいは、どーしたらいいの？　こまったー。あたし、説

明の英文（たぶん、英語…）、読めない…………。

もつと、よく見ると、画面の上に、言語の選択が、あつた。国名
と国旗のアイコンが、たくさん、ならんでいる。

あつた、あつた、Japanese…………

それ見て、まずは、登録画面に移行。

入力項目わ少ない。アドレス、4文字く8文字のパスワード。パ

スの文字わフォントとか、えらべた。絵文字や、画像もOK！　か
なりたのしい。あたし、そーとー変なのにしたおー。うフ。

ハンドルネームわ、Eureka で、いいや。

で、それからあ…………、これ、なに？

瞳 認証！　そーそ、あたしのケータイ、できるんだよ、これ。ア

イコンを、タップ。自動的にカメラうごいて。パチリ。

これでダケ？　すごい、かんたん。

でもって、さっきの ENTRE 画面にもどつて、ID（メアド）&
パスワードを、入力。

あー、すんごおい。

『世界』が、あらわれた。あたしの眼を、さいしよに奪ったのは、見
たこともない蒼さの、空だ。

蒼く燃えて、かがやくみたいなのに、澄み切っていて、しずかで、

深くて、吸いこまれそう……。まっ蒼だ。

そして、古い街なみが……

やさしい、あたたかみのある、レンガいろの屋根。やわらかな、
黄白色の壁。パステルカラーのバルコニー&窓わく。白い洗濯も

のが、ゆれてる。さまざまなタイプの人々が、歩いている。

むかしのイギリス、ビクトリア朝時代のジェントルマン。中世ドイツの農民のような人。一九二〇年代のシカゴのギャングみたいな、ストライプのスーツ、バレンチノの帽子。ロシアの祭礼僧みたいな、絢爛な貫頭衣に、長い白鬚の老人。ツノが、生えて、毛むくじやらで、翼の生えた人。アンドロイドや、異星人みたいなキャラも。藁をつんだ荷車を牽くロバや、瀟洒な馬車を牽いて、誇らしげに、ひづめの音をひびかせる葦毛の馬。龍騎兵の乗った威風堂々の騎馬。木製の車輪の馬車が、カタコトカタコト音をさせていきかう。

タープをはった露店に、いろあざやかな野菜、オリーブオイルの樽、スパイスのつまった麻袋、鍛冶屋のまえに金鍔の看板、皮なめし職人、パイプを吸う。船荷を背負う人夫が、大樽の上で、腕相撲。羊毛のつまった袋が、つまかさねられ商店。肉屋の軒下にぶら下がったソーセージ……

大きなハムが、口をひらいて、吹き出しに「ここをクリック。僕のプロフを見てね」って書いてある。こ、これ、アバター？ 変わったヒトだ……

でも、ともかく、すごい。ちがう世界みたい。

すべてが、真実みたいにかがやいている。あざやかで、深く、くつきりとして。真実だ……

カフェのテラスのテーブルに人が、あふれ、みんな、たのしそうだ。まるで、すべて、サーカスみたい。だって、広場じゃ、大道芸人のジャグリング、ピエロのパントマイムに、ジプシーの占い師、炎の剣を呑む人 e t c

あれ？

中空に架かるように、半透明のメニューが、泛かび上がってる……すごい、たくさん。へへ、日本語だから、だいじょーぶ（たぶん）。

でも、メニューから、なにをえらんで、なにをしたらいいのか、ぜんぜん、わかんない。

ここからさき、どーしたらいいのか、ぜんぜん、わかんない。

ANKAちゃんに、きかなくちゃ。でも、彼女に連絡するには、ホームペにカキコするしかないんだけど、いったん、これ、終了しなくちゃ、ダメかしら。

めんどイなー。

って、おもっていたら、「メンバーズ（ハンドル・ネーム）」つてのが、眼につく。これをタップ。

出たー、ずらっと、ならぶハンドル・ネームの列。

ひやあー、すごい数。あつた、あつたよ、おもったとおりだ、ANKAって、あつたよ。あたしは、まよわず、タップ！ おりやつ！すると、半透明な、Accept（受諾）の文字が、泛かび……

おわああつ!?

画面に、赤いちぢれ髪、女のコが！出て来た。

元氣のあふれてる、くりくりした眸で、ようすをうかがうような、おもしろがっているような、かしこそーな表情。

とツても生意氣そー。それでいて、どこことなく、おとなっぽい顔だ。

もしかして、このキャラが、ANKAちゃんのアバター？ イメージがうけど、アバターだから、リアルANKAに似ているとは、かぎらないか……

アバターが、しゃべる。

「来たね、ユリイカ。すぐ、わかったよ。待ってたわ。」

はじめまして、だよね？

こういうかたちで会うの、はじめてだから。

わたしが、ANKAよ。リアル・ワールドへ、ようこそ。ここが、真実の世界への入り口よ」

あたしは、小型マイク&イヤホンを、ケータイに差しこむ。

「これでいいのかな、ANKAちゃん、きこえる？」

「きこえるよ、ユリイカ。」

そうそう、このまえ、確認しなかったけど、あなたのケータイって、Super:Hyp - iz27（スーパー・ハイプ・イージー・ニイナナ）だったよね？

OK、それなら、だいじょうぶ。

じゃ、あとは、明日までにTrans Sky-Highっていう、アプリをダウンロードしてくれるかな。フリー・ソフトだから。ポータル・サイト（Yahoo!とか、Googleとか）の検索で、すぐさがせるよ。

これがあれば、メモリが小さくとも、100テラなみにあそべる。

でも、それだけじゃない。まだ、あなたには、よいしてもらいたいものがあるんだ。

しんばいないよ、ぜんぜん、かんたんだから。メニューのなかに、グズってのがあるでしょ？　そこ、タップして」

した。

「でね、こんどは、オプションル・アタッチメントって、ゆーのがあるから、そこを」

した。

「H M ー（ヘッド・マウント・インタラクティブ・インターフェイス）っての、あるでしょ。

それを買うものカゴに入れて。

で、あとは、あなたの住所とか、入力しといて。いま、深夜だから、着くのは、明後日ね。

支払方法は着払いをえらんでおくのよ。クレジット・カードって、持っていないでしょ？　料金表があるから、それ見て、お金よいしといてね。

日本にも、RWと提携した会社が販売してるから、できるのよ」

「へえ、ANKAちゃん、なんでそんなこと、よく知ってるの？（やっぱ、ネカマのオヤジか？）」

「あんたが知らなさすぎるわ。」

知識はアイテムよ。

なんのアイテムもなくって、無防備な、素ッ裸の状態で生きていこうとする人の、気が知れないわ。

それじゃあ、カモられるために生まれてきたようなもんよ。

ひとりの人間が素手で、十数人の敵と闘うのって、むずかしい。マシンガンがあれば、百人を相手にできるかもしれない。でも、智慧と知識とがあれば、百万人の敵にだって、勝てるのよ。

ついでに、教えとくけど、このRW (REAL WORLD リアル・ワールド) って、もともとは、MIT (マサチューセッツ工科大学) の2人の大学院生が、遊びでつくったMUD (マルチ・ユーザー・ダンジョン) だったのよ。世界中のユーザーと、プレイできる、インターネット・ゲーム。

サイバー・スペースのなかで、じぶんの好きなキャラになって、バーチャル・リアリティの世界を舞台に、自由自在に活動して、いろいろな国の人たちとバトルしたり、競いあったり、コミュニケーションしたりできる。

で、人気ありすぎて、ビジネスになるってわかった2人が会社を立ち上げ、本格的に活動して、いまみたいに、世界でも、有数のネットワーク・ゲームになった、つつーわけ」

「そんなの知らなかったよお。

有名なんだ」

「そーとーね。

さあ、ともかく、いろいろじゅんびするわよ。で、H M ー が着くまでは、フツのケータイ画面で、がまんしてね」

「それって、どういうこと？」

貯金あるから、お金払うのは、なんとかするけど、なんにつかうもんなの？」

「そのものが着いてから、説明するわ。じゃないと、レクチャーめんどくさいから。

サイバー・スペースに入るための、ドアだとおもってれば、いい

わよ」

「ぜんぜん、わかんないよ」

「いいから、あんたも、アバターつくるのよ。わたしが、教えてあげるから。ゆうとおりにしてくれる？」

あたし、じぶんのアバターをつくることになった。さいしょ、じぶんとは、ぜんぜん、ちがうタイプの、長身ちようしんでクールな、かつこいい女おんなをつくったのに、

「だめだね。あんた、そんな大人おとなじゃないでしょう。

会あったことなくとも、それぐらいわかるよ。

少すこしくらいなら、美化びかしても、いいけど、それ、やりすぎ。アバターは、あんた似ににしている。

現実逃避げんじつとうひはNGだからね」

「それ、いつてること、矛盾むじゆんしてないの、ANKAちゃん」

そういうながら、リアルANKAちゃんも、このアバターみたいな感じかんじなんだ、って考かんがえた。

「あー、あと、そのANKAちゃんっての、やめてくんない。ANKAで、いいよ。なんか、めんどくさいし」

「わかったよ。じゃあ、ANKA、現実げんじつに叛そむくのに、なんで、現実げんじつに似にせなきや、なんないの？」

「逃避とうひすんのと、捨すてるのって、ぜんぜん、ちがうよ。

じゃあ、衣装いしやうとか、テキトーに、えらんでくれるかな」

あたし、しかたなく、長い茶髪ながちやばつで、あごの小さい丸顔まるがおの、唇くちびるのつき出でた、胸むねのない、1人ひとりの女おんなの子こをつくった。

けど、眼めは少すこし大きめで、まつ毛げはかなり長ながめに反そらせる（笑）。

「へえー。まじで、こうなんだ。

意外いがいに可愛かわいいじゃん。

なんでフラれちゃったの？」

「……」

「あ、ごめん。

そーそー、今日きょうは、ずいぶん、おそくなっちゃったねー。また明あ

日、会おう。

同じくらいの時間でいいよ。つか、時間はあまり気にしないでいい。

ここでは時間なんて、なんのカンケイもないの。

じゃーね。待ってるから」

つぎの日、あたしは、ずっとぼんやりしてた。

コウキくんが、友だちと、教室で笑ってる。

アイちゃんは、となりのクラスの女の子どうし、廊下で、しゃべってる。

距離はあるけど、きっと、おたがい意識してンだろーな……。なんて、妄想する。

あたまんなかは、コウキくんとのおいだに、いままでにあった、いくつかの場面をくり返し考えてる。考えが止まンない。

そうやって、哀しみに、どっぷり浸かりながら、なんどもおもいだ出して、せつない感傷に溺れながらも、コウキくんが、じつは、あたしのコト好きだったつー事実がどこかにかくされてないかとか、さがしたりしてる。

ウケイレられナイ現実を、うけいれマイと、ひっしに抵抗してる。って、じぶんでも、わかってる。ムダだし、じぶんにとって、よくない。

でも、どうにも、止めらんない。

感傷にふけていると、少し救われたような、解放されたようなきぶんになる。つらいけど、甘いせつなさの、びみよーな心地よさが、わずかにいたみをやわらげてくれる。

だから、止められない。

けど、けつきよく、考えが同じところを、グルグルして、身もだえしてるだけだ。あたし、現実を受けとめられない。受けとめられなくて、同じところを、いったり来たりしているだけなんだ……

なんで、こうなの？

あたしは、こうなりたくない。

なのに、あたしの気持ちがちつとも、いゆうこときいてくンない。

こんなで、成長できるのかしら……

眼のまえにある現実が画像みたく感じられる。塩気のない、味の

うすいスープみたいに。

セロハンの影絵みたいに、半透明な感じで。

こんなの、ぜんぶ、おかしいよ。

これが人生なの？　こんなの、あたしの人生じゃないよ。

もお、これから、どんなことがあっても、ほんとうの喜びも、幸

せも、ありえない気がする。

もしかしたら、これって、たとえ、コウキくと、つきあってい

たとしたって、同じなのかしンない。

なんか、そんな気がしてきた。

けど、ンなの、どおでもいい。ダるイ。

1日がちよー長いよおー。

なんか、告白して以来、あとになればなるほど、つらくなってい

く気がする。

元気のない、鬱のあたしに堕ちて、わるいことしか考えられなく

なつてきてる。

妄想が、暴走して、あたしを、ひきずりまわしてる！

妄想のなかのあたし、コウキくんや、アイちゃんにむかって、世

のなか、どんだけ不公平かを、切々と、うったえてる。2人のこと、

サイトに書きこんで、復讐してる。コウキくんは、残酷でイジワル

な態度してる。2人に、あたしの病んだすがた見せて、同情ひき出

そーとか、してる。

あたし、すげえーめんどくせーやつになつてる。わかっていても、

止まんナイ（笑）。

これがほんとの、あたしナンだよ。もおー、やめよーよ、ギャル
じゃないのに、ギャルぶるのわ。あー、じぶんに返ると、コドクだ。

ぜんぶ、まやかしの、つくりモンだったんだ。ただ、ゴマかしてただけ。

教室でも、あたし、だれとも話さない。はやく家に帰って、AN KAに会いたい。RWへ、逃げることしか考えられない。

あそこにいるときだけ、じぶんだ。ここにいるのって、ただの影。授業なんか、きいてないし、先生の注意も、クラスメートのおしゃべりも、感じナイ。

あたし、死ねばいいのかな。

サイトのたたき、あいかわらずだし。

タタかれてるってことが死にやすくしてくれているみたな気がする（けどさ、フラれたことにくらべれば、真実じゃない）。

んなことで死ぬべきじゃないのわ、わあーってる。いーいじゃん。

真実なんてないんだし？ って、Devil Sideナ、あたし。

やっと、ガッコが終わった。

帰る。

夜、じぶんの部屋。

あかりをおとして、ケータイ、にぎってる。

いつもどおりなんだけど、今日は、なんだか、神秘的な、気配。

ふしぎな秘儀に、参入するみたいな、感じ。

アクセスする。

「来たね、ユリイカ。」

今日は、アイデア・アースにいくよ」

「アイデア・アース？」

「Idea（アイデア）って古代ギリシア語なんだ。むつかしい言葉だから、いまは説明しないけど、Idea Earthってのは、理想の大地って意味だよ。」

みんな、IEって、よんでるわ。

グートってゆう、アイコンがあるでしょ」

たしかに、ある。タップしてみた。画面におさまらないくらい、
たくさんのアイコンがあらわれる。スゴっ！

「それ、ぜんぶ、ユーザーたちがRWのなかにつくったワールドだよ。」

わたしのいつてる意味、わかる？」

「ぜんぜん」

「たとえばさー、サイトのなかに、自由にスレッド立てられるサイトとかあ、あるっしょー。あれと、同じ感覚よ。」

RWのなかに、RWみたいな、バーチャル・リアリティの世界がつくれるのよ。そーゆーサイトなの。

だから、技術と知識のあるユーザーたちが、オリジナルのRWをつくってる。RWのなかに、いっぱい、RWがある。

これが、ぜんぶ、そう。

アルファベット順だから、Iでさがして」

「え、どーれ？ わかんねーよ、ANKAってば！」

あっ。…あつたよ、Isa EARTH. これか。かんたんじゃん。よし。

出たあ。わあー。

むかしのヨーロッパの、お城の門みたい。中世ゴシックとか、バロックとかの建築って、じつは、ちよつと好きかも。

でも、ふつうじゃない。魔法の世界の入り口みたい。

だって、石壁が金いろのパウダー地でかがやいているし、聖句のしるされたクリムゾンレッドの帯(巻き物)というのが正しいらしい)がついてるし……

アーチ門の上に、浮き彫りになった紋章がある。ヘビと鷹とライオンと翼のある大きな角の牛がからんだ意匠。わ。かっこいいー。なんか、ワクワクするよ。

「じゃあ、つぎ。ENTERをタップして」

「わかるよ、それぐらい。少し見とれてただけじゃん。ふいッ」

「いいね。元気になったじゃん。」

でもね、わたしの話をよく聞いて。

タップしたあと、JOIN（加入）と MEMBERS の2つのアイコンが出るから、あんたはJOINをえらんで。

そこは、ご新規さんの場所だから、わたしは、入れない。

あんたは、そこで新規登録をして、そのあと、じぶん独りで考えて、IEのなかで生きるための初期設定を採ばなくちゃならないのよ」

「生きるための初期設定って、たとえば？」

「初期設定ってね、ようは、スタートラインに立つための、出発のじゅんびなの。

IEの世界では、『クドク』ってゆう、ポイントをつめば、レベルが上がって、ステータスや、アイテムや、フォース（力）がそなわるわ。

でも、さいしよは、スタートのときにもらえる500イミオンの所持金のはんいで、装備をそろえなくちゃ、いけないのよ。

これが初期設定の1。

それから、もう1つ。装備と同じくらいいいえ、いいえ、いちばん、だいじなことがあるわ。

初期設定の2。基本キャラの設定よ。

IEで生きるじぶんのアバターのキャラを設定しなくっちゃいけないのよ。

設定すると、性格や行動や運命が影響される。

どういうふうに、成長していくかが決まるの。

どお？ IEでは、じぶんを、えらべるのよ。

現実世界では、じぶんがどんなキャラで生まれるか決められないでしょう？

それって、不当だと、おもわない？

少なくとも、わたしたちは、それが不当だと、感じるようにつくられてるわ。そう感じるようにつくられているのに、決められないのよ。

いつてること、わかる？

いじわるでしかないわ。すんぐおい不当^{ふとう}よ。けど、IEは、ちがう。それが自由^{じゆう}と平等^{びやうびとう}だわ」

「まち？ でも、ムリだよ、あたし。決め^きらんない。まだ、なんにも、わかんないもん」

「人生^{じんせい}なんて、みんな、そーじゃん？」

かるくゆーよな。

「学校卒業^{がっこうそつぎよう}したら、世^よのなかのこと、なんも、わかんなくても、就職^{しゅう}えらばなきや、なんないでしょ？ それと、同じ^{おな}。

就職^{しゅうしよく}えらぶとき、ほんとうに正しい選択^{ただ せんたく}してる人^{ひと}なんか、いやしないわ。

だれにも、結末^{けつまつ}は見えてないんだからさー」

「でも、シューシヨクって、まだ、ずいぶん、さきの話^{はなし}だよね……」

「すぐよつ、のんきね。

いつでも、戦闘^{せんとう}モードで、いなくっちゃ！

そうでなきや、おもしろくないし。

さあ、そんなことより、出発^{しゅつぱつ}のための最低限^{さいていげん}の装備^{そうび}！ まさか、

あんたも、裸^{はだか}でIEのなかに、飛び出^としたくはないでしょ。

でも、ぜんぶで、500イミオンだからね。

装備^{そうび}をそろえるためだけに、ぜんぶ、つかっちゃ、ダメ。はじめの生活費^{せいかつひ}も、のこしとくんだよ。いい？

かぎられたお金^{かね}のなかで、えらぶんだよ」

「しつけー。

んな、なんども、いわなくとも、意味^{いみ}わかるよ。

でも、だいたい、いくらぐらいまで、つかってだいじょぶなの？」

「だからっ、それは、じぶんで、考え^{かんが}るの！

ただ、はつきり、いっとくけど、さいしょの、最低限^{さいていげん}の装備^{そうび}に、なにをえらぶかで、スタートのつらさ、そーとー、ちがうわ。よーく考え^{かんが}てね。

IEのスタート時^じって、かなり過酷^{かこく}な状況^{じようきよう}のはずだから、選択^{せんたく}を

誤ると、ひどいめに遭うよ」

「ええー！ まちで？ でも、ケータイで、なんで、そんな、怖いことになるの？」

「H M ー がくればわかるわ！

今日のところは、設定をすませるだけにしておいて。

どっちにしろ、設定が終わっても、H M ー がなくちゃ、スタートしないし。

よーするに、H M ー がなくっちゃ、参加できないのよ。

H M ー が来たら、I E の入り口で、また、会おう。

じゃー、がんばって」

「えーっ、ちよつと、待ってえ！」

「くれぐれも、金額のはんい内で、やるのよっ！」
しつけー。

あーん、しょーがない。やるつきやないってことね。あたし、とにかく、ENTRE をタップした。画面が変わる。

すぐく、リアルな、バーチャル世界だった。

ほんとに、CG かよ？ って感じの。

まるで、月面のような、音のない、微動もしない、世界。

小さなケータイの液晶パネル・モニターなのに……あたしを吸い

こんで、圧倒する、星のちる、巨大な宇宙空間。

地平線には、青くかがやく地球が見えている。

砂地のような、白っぽい地面に、起伏があつて、闇に白く泛かび

上がる砂漠みたい。

あたしの眼のまえには、大きな建物の土台みたいなものがある。よく見ると、それ、とてつもなく、大きな文字だ。魔法の呪文みたいな文字だ。きつと、1文字が数百メートルぐらいあるにちがいない。

メニューのアイコンが空中にならんでなきや、怖いくらい。これ、50 インチ画面で見てみたいなあ。

JOIN を、タップした。また、画面が変わる。

暗い場所だ。

ぼんやりと、見えてきたのは……

四角い石をつみ上げてつくった、ものすごく大きな建物のなかに、あたし、いた。

上のほうは、うす暗くなっちゃって、天井なんか、見えない。暗鬱だ。篝火が燃えて、照らされる石の床。こういうの、広間っていうのかな？

ケータイの画面なのに、かすかに煙の匂いを感じられるくらい、リアルだよ。

中央に、大きな盤があって、炎が上がっている。祭壇っぽい。そのむこう、とおくにある正面の台座には、王の席があるけど、だれも、坐っていない。

背もたれのうしろの、両わきに、篝火が燃え上がっているだけ。長い壁には、槍や楯、戦旗や柄の長い斧、タペストリー。大きな古い肖像画がたくさん、ならんでいて、こちらをにらむ。

王座に欄が2つ、ならんでいる。

IDとパスワードを、入れる欄だ。

どこの国の文字でもいいから、半角小文字と半角数字で、IDを決められる。パスはRWと同じで、画像OKだった。

あたし、じぶんで画像を編集してつくった。

2つの項目の設定が終わると、中央にある祭壇の炎の上に、半透明のボードが浮かび上がってきた……

いちばん上に、あたしのIDがあって、下に、characterの欄がある。

キャラの欄を、タップ。5つの選択肢が半透明になって、あらわれる。明滅した。

『❖軍武力❖ ❖聖性❖ ❖叡智❖ ❖運命❖ ❖平和❖』

なんだか、よくわからない。翻訳ソフトのせいかな？ キャラクターで「運命」って、どーゆーキャラよ。カーソルを、そこに、おいてみる。

説明が泛かび上がる。

「運命を肯定し、運命を愛する者。聖性と叡智とをかねそなえるが、軍武力に乏しい。こころは平和である」

へー。意外に、イーじゃん。

でも、「叡智」にしよう。ANKAが知識は武器だ、って、イッてたもおん。あれ？ 知識と叡智って、同じようなもんだよね？

はい、はい、それで、次はEquipment and Wearか……………これが装備かな。タップ。

いろいろな品名が出てくる。やっぱ、そうだわ。さて、どーしよう。

だいたい、寒いか、暑いかも、わかんないんだよねー。んー。暑けりやあ、脱ぎやいい、って、いうし。

暑い場所での装備と、寒い場所での装備の、両ほうそろえると、かなり高くなりそおーね。ってことは、寒冷地仕様でいくか……………

うーん、寒冷地仕様って、荷物になるよなあ。でも、しかたないよなあ。うーん。

決めるつきやない。2つ、いっぺんにわ、物理的にも、ムリだし。い。おおし、決めたあ。

極寒地仕様だあ。

じゃ、アウターが通気性のある防水で、インナーが毛皮の防寒着。靴はブーツのしよ。帽子も買おう。いちおう、マフラーも。じゃあ、これと、あれと、それと、かれと、これと……………んー、やっぱ、けっこう、かさばるなあ。

これ、見こみちがいで、暑かったら、まち死ぬわ。

そんなときや、捨てるしかないのね。いいのかなー、エコじゃないけどなあー。

あ、これ、おもしろい、超軽量懐炉だって。

燃料つきだよ。30イミオン？ 高っ！ いやーでも、ちよつと、ほしいよー。あたし、ちよー寒がりだし。なんか、かつこいーし。よし。

ぜんぶで、282イミオン！ もしかして、あんがい、イーセン？ あ

たしって、すごいかも！　キャー。

おーし、じゅんび、できましたーっ！

ん？　なんか、メッセーじが^で出てきた。

「H M ー ー 着用の上、入場せよ」

まだだっ、っーの。

ぢゃあ、今日^{きょう}はここまでえ。

翌朝^{よくあさ}。

あいかわらず、つらいわ、教室^{きょうしつ}。すげー。

まぢ、ありえない……

っテ、いえるぐらいの、元氣^{げんき}がもどってきた、氣^きがする。R W の
おかげか？　しかし、完治^{かんち}には、まだ、ほどとおい。

冬^{ふゆ}の朝^{あさ}に独特^{どくとく}の、ここえた空氣^{くうき}って、教室^{きょうしつ}のざわめきがよくひびく。

あたし、ぼんやり机^{つくえ}にむかって、坐^{すわ}ってるン。あーあ。

学校^{がっこう}はアクイの世界。たとえ、いまは、よくても、明日^{あす}には転落^{てんらく}
する。いつも悪意^{あくい}がひそんでいて、なかよしも、あてに^きなんない。氣

をゆるせない。接客業^{せつきやくぎょう}にちかい。機嫌^{きげん}わるくても、おちこんでい

ても、あかるく笑顔^{えかお}。しなきや、サイトで、たたかれまくり。ボコ

スカボコスカッ。はあ。

あたしのばあい、もうおそい。すでに、たたかれまくりだもん。

運命^{うんめい}なんて、だれが愛^{あい}せるンだよ？　そんな人^{ひと}がいたら、見て^みみた
い。

痛み^{いた}は、どう？　だれも、きいてくれないから、じぶんできく。

痛い^{イタ}よ。すごく痛い^{いた}。ちよー痛い^{イタ}よ。

どんだけ、いえば、いいの？　いったら、ゆるしてくれるの？　ど
ーせ、ゆるしてなんか、くれないんでしょ？　どうにもしてくれな
いんでしょ？　たすけてなんか、クレナイんだよね？　どおーにも
なんないんだよね？　いったい、なんなの！

って、ヒステリックになっても、意味ない。なんで、現実って、こんな仕様なの？　なんで！　なんで！　なんでーつ、って、百万ひやくまん回かいくらい、ききたいわ。

どうでもいいから、はやく家うちに帰かえして。はやく夜よるになつて。はや
くあたしになりたい。なのに、まだまだ、午前ごぜん10時じ。拷問ごうもんのように
長ながいわ、今日きょうも。

あたし、胸むねイタみながらも、コウキくんの声こえや、うごきを感じかんじる
と、眼めで追おわずにいられない。いろんなこと、妄もうそう想する。

まぢストーカー。いけないって、わかっていても、止められない。
 こころがはげしくさいなまれるから、止められない。お願い、だれ
 かたすけて！ だれでも、いいから、たすけてよ！

授業とか、どーでも、いい。昼の休憩なんか、いらないつつーの。弁当なんか、食いたかねーよ。教科書も出さないで、ケータイでネット見てる。先生が怒って、教室から、つまみ出してくれば、いい。泣いたふりして、家に帰ってやるわ。どーせ、すべて、かたちだけ。つくりモンなんだから。どーでもいい。

午後
：
。

もー、ムリつ、って、おもつても、現実げんじつは、ちつとも、ゆるして
くんない。時計とけいの秒針びょうしんがせせら笑わらうような表情ひょうじょうで、のんびり、ゆつ
くり、うごく。

テメー、ざけんなよ。まだ、2つも、授業あンのかよ。コロす気
ふた
 かよ？ 情状酌量とかナイの？ ありえナインダケど？ ジョーダ
じょうじょうしやくりょう
 ンぢやねー、こーなつタラ、生存かけた闘いだあつ！？……………
せいぞん たたか

〰
 ☆
 ✕
 •
 ?
 ∂
 (Λ⁰Λ)
 ♡
 Φ
 𐌆
 𐌇
 σ
 ▼
 π
 δ
 ♡
 屍
 ˘
 +
 ○
 ℤ
 love
 β
 ;
 *
 ◇
 •

こな雪ゆきま舞う、かえ帰り道。うち家にやつと着いて、へやじぶんの部屋で、ぼおー
 つとしてると、くるま車の停まる音おとがした。き来タァー。

H M の箱、おもったより小さく、あけて出てきたものは、

「なんじゃ、こりやあー」

わああ。なんだか、アールヌーボー調？ ティアラみたい。

あれ、コードがついてる。そういうことか。ケータイに、つなぐ。

「これでいいのかなあ……」

すると、ケータイがかってにうごいて、「インストールしてよいか？」だって。

あたし、ダウンロード、つてとこを、タップ！ ダウンロードがはじまる。終わった。

ぢやあ、いくか、わあーるとどへ！？

いちおー、ANNKAのホムペに、書きこみしておく。

あたしさー、これからいくからー、つて。

RWを立ち上げ、IEのゲートを“くぐる”。

『H M I I、つかいますか？』の表示。決まってんじゃん。あたし、タップ！？

なんか、注意書きが出てくる。メンドイので読まない。つぎ、いく。おおーッ！

なんにも、見えなくなる。まっ暗だっ！ 意識がひっくり返って、べつの世界に、いったような感覚。いやだ、たいへん、こわい、ヤバいっ！

え？

光が見えはじめた。

あ、ああーっ！ きやああーっ！

こんどは、スゴイまぶしさで、眼があけらんねー。

光の氾濫のなかで、だんだん、モノがかたちをあらわしはじめる。

え、わかんない。どーゆーこと、これ！

信じらんナイ！ なんなの、ここ！ ナンデ、あたし、ここにいないの！

っーか、つてか、つてゆーかあ！

あたしは、IEのなかにいた！

まちで、あたし、ここにいる。じっさい、現実にいた。胸壁のあ
る黄金の城壁と、紋章のある城砦の門を……見上げている！

でも、どーゆーことなのッ！ これ、H M ーのせいなの？

A N K A のアバターがあらわれた。現実の存在として、あたしにむかって、歩みよつて来る。あたし、怖くなって、あとずさりした。

「来たね、ユリイカ。待ってたよ」

「A N K A なの？　すごい、あたし、どおなっちゃったの？　これつて、ぜんぜん、わかんないんだけど、どーゆーことなの！」

「H M ーは来た？」

「来たよ、でも」

「じゃあ、あんたも、いまは、バーチャル・リアリティのなかにいるのね、あんたのアバターになって。あんたは、いま、じぶんのアバターになって、ここにいるのよ。わかる？」

「わかんないよーお（涙）」

「泣くな。」

H M ーはね、インタラクティブ・インターフェイスなの」

「ほう？」

「いーカラ、きけ（笑）。

あんたは、いま、I E 世界をバーチャル・リアリティ体験しているのよ。わかる？」

「わからんわい」

「現実つてーのは、脳内で製作されてんだよ。」

眼で見たり、耳できいたりしたもので、神経をつたわって、脳におくられ、脳内で合成されて、画像や、音になるんだよ。それがふつー、『体験』つて、よばれているものなんだ。

R W のサイトがおくつてくる視覚データ・聴覚データ・触覚データ・嗅覚データ・味覚データの情報を、ちよくせつ、H M ーが脳へおくつてくるのよ。

つまり、眼・耳・皮膚・鼻・舌をとおさないで、情報が入ってくる

H M ーつて、そういうふうな情報をおくる装置なの。じっさいには、存在しないものが脳のなかで、現実としてあらわれるのは、

そのせいなのよ。人工的につくられた『体験』よ。

ここまでは、わかる？」

「・・・なんとなく、わかったけど、よくわかんない」

「ぜんぜん、わかってないっしょ！」

ねー、たとえばさー、いま、あんたの眼のまえにさ、リンゴがあるとするじゃん」

「うんうん」

「そのとき、リンゴに光があたってるって、想像してみて。

で、光は反射するじゃん。

その反射した光が眼球のなかにある網膜にあたるのよ。あたると、その刺激が情報データになるのよ。

そして、神経をつたわって、脳へおくられる。

すると、脳が情報を処理して、画像をつくると・・・

あーら、ふしぎ！ リンゴが見えているじゃない！ って感じになる、つーわけよ」

「最後が・・・ちよつと、ややこしかった・・・かな？」

「だからさー、じっさいに、テーブルの上にあるやつとは、べつもののなの、わたしたちの見てるリンゴは。わかるっしょ？」

「んー。ま、ゆわれてみれば、そーかなあ的な・・・」

「わかったのかなー？ まー、いや。

ともかく、すべての音や、においや、手ざわりや、味なんかも、脳がそーゆー感じで、つくってるのよ」

「へー」

「それだけじゃないわ。

おなかがすくのは、胃がキューキューしているからだって、おもってるかもしれないけど、ちがうわ」

「へー」

「じっさいは、脳のなかでつくられてるのに、あたかも、胃でそれが起こってるよーに、錯覚させてるのよ。

痛みも、そう。

すべて脳のうにあるわ。脳のうがつくる幻覚げんかくなのよ」

「ゲンカクっ！」

「とーぜん、幻覚げんかくだよ。

脳のうに着くまえは、いろでも、かたちでも、かおりでも、味あじでも、おいでも、なんでもないんだからさ。

ただ、無味乾燥むみかんそうな、電気でんきっぽい信号しんごうでしかないのよ」

「信号？」

「まー、そんなもんよ。

なんだって、そうでしょ？

データって、みんな、信号しんごうのかたちでつたえられるじゃん。電話でんわだって、そうじゃん」

「そうだったんだ……」

「……。と、ともかく、すべては信号しんごうで、おくられるデータなの。だから、H M Iで、ちよくせつ、脳のうに入力してやれば、眼めで見なくても、手てでふれなくても、鼻はなでかがなくても、耳みみできかなくても、舌したでなめなくても、見みたり、かいだり、きいたり、味あじわったりすることができ、ってこと。

じっさいには、存在そんざいしない現実げんじつを『体験たいけん』できるってことよ。

だから、あんたに、いま、ここI Eにいるのよ」

「氣きのせいかな、わかったきぶんになってきた」

「ほんとかなよ。

じゃあ、ともかく、いこう。歩きあるながら、話はなそうよ」

あたしたち、城門じょうもんの扉とびらのまえまで、歩あるいた。ふしぎにおもった。

「ねえ、あたし、いま、じぶんのアバターあバターになってるんだよね。

だから、あたしが歩あるこうとおもえば、歩あるくし、右みぎにいこうとおもえば、いくし、右手みぎてをふろうとおもえば、ふれるし、つかめるし、あたりまえっちゃ、あたりまえなんだけど、やっぱ、ふしぎな氣きがするって、変へんかな？」

「へんじゃないよー。意外いがいに、かしこいじゃん。

そーだよ。ふしぎだよ。

じゃ、教えてあげる。H M ーがね、あんたの脳にある脳神経細胞のインパルスを読みこんで、アバターを自由にうごかしてるのよ」

「ぜーんぜん、わかんないんだけど」

「インタラクティブ、ってのはね、双方向、って、意味よ。つていっても、わかりにくいよね。」

たとえば、いま、アバターの見たりきいたりしている情報を脳におくりこんで、バーチャル・リアリティを観せてるわけでしょ。

逆に、あんたの脳から、情報をおくって、アバターをうごかすこともできるのよ」

「ほわー」

「あんたがあたまで考えただけで、なんの操作もしなくても、アバターを自由にうごかせるってわけよ」

「おもしろそー」

「もう、体験中だろ（笑）」

天才的な人は、考えられないようなはやさで、複雑な超絶の体技をするんだよ。そういう人は、戦闘系ゲームでも、アイテムをあまりつかわない。純粹に、技量で闘うバトルを好むよね」

「えー、ここでも、才能なおく」

「しょうがないよ。」

じぶんでは、現実にできない、やったこともないうごきを、キャラにさせるために、その命令を、じぶんの脳でつくり出さなくちゃ、いけないわけだから、センスってゆーか、才能の差が出ちゃうんだよ」

「ねえ、いま、あたしたちって、フツーに、しゃべってンじゃん。」

これも、そうなの？」

「そーだよ。」

ユーザーの脳の活動を読みとって、アバターをしゃべらせるようにするのって、かなり難題だったみたいね。

あたまのなかで、しゃべったセリフを、ぜんぶ、アバターにしゃべられちゃ、こまるでしょ。ユーザーがあたまのなかで、じぶんだ

けに語^{かた}ってるのと、ふつうの会^{かい}話^わとを、区^く別^{べつ}しなくっちゃ、なんないからね。

それって、すごく、たいへんなことだったらしいよ。

だってさ、H M ー^{ハミ}ー^ーが読^よみとるのは、どちらも、同^{おな}じような脳^{のう}内^{ない}の信号^{しんごう}でしかないんだからさ」

「まぢ、すごい」

「脳^ニ神^ユ経^ー細^ロ胞^ンのネットワークを走^{はし}る電^イ氣^ン的^バ現^ル象^スの、びみよーなちがいを区^く別^{べつ}するのよ。それによつて、ユーザーの感^{かん}情^{じょう}を読^よんで、アバターに反^{はん}映^{えい}するのよね。

ゲームの奥^{おく}も深^{ふか}くなつていくよ」

「うんうん。なんとなく、わかる」

「それから、あんたの手^て首^{くび}、見^みて。

ほら、ホルダーにおさまったケータイがあるでしょう。

わたしたちは、いま、現^{げん}実^{じつ}のケータイが見^みえないから、ケータイを操^{そう}作^{さく}したいときは、それをつかうの。アイコンみたいなものね。

プレイ中^{ちゅう}に、サイトの外^{そと}にあるアプリーションのダウンロードが可^か能^{のう}なんだよ」

「へー」

あたし、じぶんの左^{ひだり}腕^{うで}を見^みた。

F 1 マシンみたいにアグレッシブな、チタン製^{せい}の流^{りゅう}線^{せん}形^{けい}ホルダー (Aero Jacket エアロ・ジャケット、つていうらしい) に装^{そう}甲^{こう}された、あたしの Super;Hyp - iz27 がおさまっている。

「これって、けっこー、だいじなことだよ。

だって、この装^{そう}置^ちがなきゃ、バーチャルな世^せ界^{かい}に入^{はい}ったとたんに、ケータイの操^{そう}作^{さく}ができなくなっちゃうんだからさ。

I E を退^{たい}場^{じょう}するときとか、ケータイを操^{そう}作^{さく}しなきゃならないときに、ぜったい、ひつようなの」

「ふんふん、これね。わかったよ」

扉^{とびら}のまえで、あたしたちは、止^とまった。

見^み上^あげると、とてつもなく大きい門^{もん}扉^びだ。見^みた感^{かん}じだけで、ぶあ

ついのがわかる。素材は櫨の木みたい。まっ黒で、重そうな金属のボルトで留められ、厳しい感じ。なんか、こえーお。

「んで、この扉、どーしたら、ひらくの？」

「ばかね、あけなくとも、いいのよ」

彼女は、ノックした。・・・そんだけか。

巨大な扉の一部に、小さな扉が切られていて、ひらく。小さな扉、つつーでも、高さわ2メートル以上ありそーだが。

鉄兜をかぶった門衛が出て来た。ぶあいそうで、まあーるい、大きなギョロ眼。

キズだらけで、荒々しい革製の鎧、粗っぽく伸びた顎鬚、鋌つきの兜の左右に大きな角がついていて、海賊か、山賊にしか見えない。

とうてい、『理想の世界』の門衛とは、おもえないけど・・・

革の鎧には、まかふしぎな文字が型押しで浮き彫りになっている。

アラビア文字？

眉を持ち上げ、あたしたちをぎろりと見下ろし、

「これよりさきは、ルールなき非情の現実世界とは、まったくちがう世界。

真実と正義を胸に抱くことこそが幸福になるための、唯一の手段である世界。

すなわち、真の世界。

この門をくぐる者は、こころ正しくあれ。

よって、『自らを、睿らかにせよ。

真実は、自らを、自ら睿らかにする。

汝は、汝をもちい、汝じしんを、しめせ』

すなわち、IDとパスワードとを晰らかにせよ」

・・・・・・は・・・はあ？

あたしは、どうするのかわかんなくて、ANKAの顔を見る。

彼女わ、

「ちよっと待って、ユリイカ！

そのまえに、持ってる装備をつけて。ぜんぶね。

このさきがどうなってるか、わかんないのよ」

そんなあ……、ちょー不安ふあんになるんですけどおー。

つてのは、さておき、急いそいで、身みにつけた。ぜんぶ。

超軽量ちやうけいりやう懐炉かいろうは信じしんじらんないくらい、かるいけど、かさばりぐあ

いがハンパじゃねー。

ちょー着きぶくれた。

奇妙きみょうな生きものに、なっちゃった……

「これでいいのかなー、ANKA」

「す、すごいね、それ。」

あんたがそこまで、やるとは……想定そうていしてなかったわ」

「大だいは小しょうをかねる、って、ゆーじゃん」

「ちよっと、ちがうけど、まあ、ギリギリ意味いみ、わかったわ。

じゃあ、いいよね。いくよ」

「だから、どうやるのよ」

そのとき、とーとつに、門衛もんえいがくり返かえす。

「IDとパスワードとをしめせ。」

さあ、『自らみづかを、あらわしめよ』

されば、IEの1つの天てん、4つの海うみ、5つの大陸たいりくへの道みちがひらかれるであろう」

「いいわ」

ANKAは、こたえた。左手首ひだりてくびのケータイを、右手みぎての指ゆびで、タツプ。

空中くうちゆうに、半透明はんとうめいの、古ふるびて、すりきれた羊皮紙ようひしが泛うかんだ。

古代こだいギリシア文字もじのID。

甲骨文字こうこつもじと、梵字ぼんじ（サンスクリット文字もじ）と、楔形文字くさびがたもじと、古代

エジプトのhieroglyphとで構成こうせいされた、パスワードがしるされてる。

ANKAも、ヘンだわー。

門衛もんえいがいう、

「光ひかりによって、すなわち、睿あきらかに確認かくにんした。正義せいぎによって、汝なんじは、存在そんざいする。いま、生命せいめいが宿やどった。いけ。現実げんじつのなかへ」

そんだけカヨ？ あたしも、まねする。

ちなみに、あたしのパスワードは本阿弥切ふうの、かな文字。台紙は、とーぜん、和紙だ。ヘンでしょ？（笑）

門衛が鎧から、金の鎖のついた金の懷中時計をとり出した。似あわねー！

しかも、文字盤がふくぎつな天文時計だ。

太陽や、月や、火星や、水星や、木星や、金星や、土星の表示があつて、黄道十二宮の星座のうごきが表示されている。

あたし、ふたご座なんだけど、いま、星の位置つて、どうなのか……

「汝らが入場する I E の設定時刻は、午後 7 時 40 分。

その時点からの、スタートとなる」

門衛は、扉のむこうへ、もどつて、消えた。

あたしたちも、追うように、そこへ、扉のむこうへ、すすむ。

入った。

一瞬、眼のまえに、半透明のボードがあらわれ、

ANKA	クドク (QDQ) ・ポイント	2
ユリイカ	クドク (QDQ) ・ポイント	2

すぐに、消えた。まっ暗だ。それだけじゃないっ！

ふおわわわあーっ！

吹雪だよおおおおっ！

3 理想の世界かよ？

しかも、うわああああー、すごい猛吹雪ッ！ まっ暗、なんも、見えねーっ。

めちやめちや顔に、氷雪の粒が撃ちこまれる。い、痛えーよお！
あ、ANKA も、見えない。あたし、はやくも左手首の Super:Hyp

- iz27でESCしそうになった。だってーっ、すんげえ寒いッ！ 音
も、もんのすんげえーッ！ こ、怖いよーっ！

「ユリイカ、わたしにつかまって」

ANKAの声がする。声のするほうへ、手を伸ばした。手があつた。ANKAの手が見つかった。がしっ。つかまえる。

「なんなの、いきなり、これって」

「こういうもんなのよ！」

スタートって、かならず、北から、北大陸から、はじまるのよっ」

「な、なんで、南じゃいけないわけっー？」

「んなこと、ゆってるばあーいじゃないよっ。いいから、手離すんじゃないよ、ユリイカ！」

「ANKA、怖いよお！ 死んじゃうよー」

「ばか、そんなこと、いってんじゃないの、しっかりつかまってえ！」
そういつてるANKAも、けして、だいじょうぶじゃなかった。

「ねえ、どっちにいったら、いいか、わかってんの、ANKA」

「わかるわけないじゃん、テキトーよ」

「やだよ、そんなの、帰る、まち怖い！」

「なにいつてんの、人生なんて、そんなもんじゃない」

かるくゆーよなー、そーゆーセルフ……。しかし、寒さハンパじゃない。あたし、懐炉があるから、がまんできるけど、ANKA死んじゃうんじゃないの、リアルに！

「やっぱ、ヤバイよ。ANKA、だいじょうぶなの」

「わたし、2月生まれだよっ！」

「じょーだんいつてるばあいじゃないよ、これ、マイナス30度とか、40度って世界じゃなか」

「ばかね、わたしたちのほかに、なん十万人も、ユーザーがいたのよ。」

「できるわ、冷静に考えなさい」

考えられんわ。しゃべるにも、口のなかが凍りそう。ってゆーか、まつげとか、すでに、凍ってる気がする。パリパリした感じで重く

て、うっとーしいよ。それ以前に、雪つぶてで、眼があげらんない
おく。

ANKAが、

「風が来る方角が北かな」

「だから、なんなの？ 地理がわかんないのに、方角わかって、
意味ないじゃん」

「北とは、かぎらないわね」

「そうじゃなくって」

「だまって。」

これは、さいしよの試練なのよ、つまり、進行方向に、困難が
あ
るはずだわ。

そんなら、風がふいてくる方角がいくべき方角なのよ！」

「待ってよお、風むきつて、けっこう、さつきから変わってるよつ。」

そんなに、一定じゃないみたいなんだけどお！」

「意外に、冷静じゃん」

「いま、ほめられても、ぜんぜん、うれしくなーいつ。それより、

なんとかしようよ！

雪に穴ほって、朝を待つ、って、ダメなの？」

「よく考えてごらん。湿度が低いでしょ？ 凍てついた氷雪よ。雪

はさらさらして、ふき上げられるから、たいしてつもってはいない

はずだわ。ムリよつ」

「でも、どこへ、いけばいいのよ。」

いきさきも、決まってるないし、そもそも、方角も、わかってない
し、どーすんのよお」

「だまってよ、いま、考えてんじやない」

「はじめに考えトイてよー」

「ばか、こーゆーゲームなのよ」

「知らねーよつ」

「ケンカしないで、クドク・ポイントさがるよ」

「カンケーねー、もーヤダ、帰るっー」

「待つてよ」

「やだ！」

「現実世界に、また、もどるのかよ！」

・・・そっか。

もどりたくない。

あたしをたたくサイトがある世界。コウキくとアイちゃん트가
ラブラブな世界。なにもない、物理的な乾いた世界。

それに、ドーせ、ここでのことは、幻影なのよ。そーよ。

ケータイで、あたしのクドク見た。○○：1だ。やばい。まえむ

きに、なんなくちや。

「でも、リアルに寒いよ」

「脳がつくった表象よ、どーってことないわっ」

「そーなんだけど、で、でも、寒いよ、まちで。どーすんのよお！」

「考えるのよ、考えるの！ 叡智を、ここで強く求めて！」

「できねーよお、寒すぎる、ひやあぁー」

すさまじい風のせいで、氷雪がほっぺをムチのように、切る。か

らだがちぢこまる。さぶーいよおー。

「ここはね、現実とちがって、意味のある世界なのよ。

現実って、よい人も、わるい人も、意味もなくここえさせるわ。

でも、ここは、ちがう。ここえさせるときには、ここえさせなく

つちや、ならない意味があつたのよ」

「イミって、なによ。あたし、まえから氣にイんないんだけどさー、

イミって、くだらねーよ」

「うっさい、考えてンのよっ」

「はやく考えなさいよ」

「ちよっと、待つてよ。あんた、風むきが一定じゃないって、いつ
たよね？」

「かもねっ、ひや、ひやぶひい」

「とうぜん、そうなんだわ」

「なにがよ？」

「まっすぐな道^{みち}なんて、ないわ。道^{みち}って、まがったり、まっすぐだったりすんのよ」

「それがなんなのっ？」

「だから、風^{かぜ}にむかうのよっ！ やはり、困難^{こんなん}のあるほうへ、いくべきなのよ。ぜったい、正解^{せいかい}のはずだわ！」

風^{かぜ}がみちびくってこと……？ もー、それでいいよおー。

風^{かぜ}にむかって、すすんだ。風^{かぜ}むきが変わ^かると、歩^{ある}くむきを変^かえた。

しばらく、そうやって、すすんだ。○○○にもどっていた……

「あれ？」

「えー、そんなー。ANKA」

「考え^{かんが}かた、まちがってたのかナあ……」

眼^めのまえに、ごつごつした岩^{いわ}の絶壁^{ぜつぺき}。ここに来^{すんぜん}る寸前^{すんぜん}まで、気^きがつかなかった。まっ暗^{くら}だし、まともに顔^{かお}を上げたらんかったせいだ。

ほぼ90度^ど、ほとんど、雪^{ゆき}をかぶっていない。まっ黒^{くろ}い巖^{いわ}の壁^{かべ}。

いかめしい無表情^{むひょうじょう}ナしかめっツラで、あたしたちを見^み下^おろしているみたい。コワイ。

「ひき返^{かえ}そう、ANKA」

半泣^{はんな}きで、あたし、さけんだ。

「そんなはずない。まちがってないわ。」

わたしたちは、正^{ただ}しいのよ」

彼女^{かのじょ}は、あたしの手^てをふりほどき、岩壁^{いわかべ}をたたいて、雪^{ゆき}をはたきおとした。

「あ！」

へたくそな、へんてこりんな絵^えと、文字^{もじ}。それが深く彫^ほられていた。

文字^{もじ}はアルファベット。たぶん、英語^{えいご}だ。よく眼^めにする文字^{もじ}なんで、あたしにも、なんとなく読^よめる。

……けど、なんだ、この、ぐにやぐにやな絵^えわ!? こっちほうは、さっぱりわかんえーよ！

「アルファベットは、エスプレッソ (espresso) ……ね」

A N K Aが考^{かん}えこみながら、いった。

「わかるよ、でもさー。」

なんで、エスプレッソなの？ わかんないよ、A N K A！

：…もちろん、飲^のみものだってことはわかってる。けど、いま、それになんの意^い味^みがあんのか、

ぜんぜん、わからないよっ！

「意^い味^みがあるはず。考^{かん}えましょう」

「イタ寒^{さむ}くて、ナンも、考^{かん}えらんねーよ」

A N K Aは、じつと、考^{かん}えてる。はやく、なんとかしてよー。

「コーヒーのエスプレッソのはずない。それじゃ、意^い味^みがない。

だから：…」

「だから、なによー」

「急行^{きゅうこう}列車^{れつしや}よ。

エスプレッソには、その意^い味^みがあつたわ！」

「列^{れつ}車^{しや}？ どこに、あんのよ、そんなもん！」

「この絵^えがもう1つのヒントよ。これ、鳥^{とり}に見^みえるわ」

「でえ？

鳥^{とり}がなんの意^い味^みなのよー。

だいいち、鳥^{とり}に見^みえねーんだけどおー」

「鳥^{とり}よ。

お^おお^おわ^わかし^{かし} 中^{ちゅう}国^{ごく}の漢^{かん}字^じ。甲^{こう}骨^{こつ}文^{もん}字^じよ。

見^みた感^{かん}じは、字^じってゆーか、絵^えにちかい。鳥^{とり}には靈^{れい}魂^{こん}の意^い味^みもあ

る、ってきいたことけど…

それがなにか関係^{かんけい}するのかなあ、：…うー、さぶイわ」

「この、←（やじるし）みたいなヘンな絵^えが：…鳥^{とり}？

甲^{こう}骨^{こつ}好^{こう}き^きだったんだけど、氣^きがつかんかったー」

「わ！」

「なによ、びっくり顔^{がお}になつてさー」

「あんた、いま、じぶんがなにいったか、わかってないの！ そう

よ、それよ、矢^やじるしだわ。

この矢^やじるしが指^さすほうへ、いけばいいのよ！」

「あー、そーいわれると、そー見^みえるねっ、ぶるるっ」

「しかも、ほら。矢^やじるしの指^さすほう、登^{のぼ}り坂^{ざか}になつてゐるし、風^{かぜ}もそっちのほうから、ふいてゐるし。

つまり、困^{こん}難^{なん}がある方^{ほう}向^{こう}だわっ」

「な、なるほど。でも、わかつて、うれしくない。また、風^{かぜ}にむかつて、すすむのね。ぐすん」

ふたたび、あたしたちは、歩^{ある}く。

風^{かぜ}が変^かわるたびに、むきを変^かえた。

顔^{かお}に、痛^{いた}く、冷^{つめ}たく、たたきつける。

かたくて、こまかい氷^{ひょう}雪^{せつ}。

闇^{やみ}に、眼^めがなれて、雪^{ゆき}がよく見^みえるように、なつてきていた。木^こ立^{たち}も、さつきより、よく見^みえてゐる氣^きがする。

「なに、あれ？」

ANKAが指^{ゆび}さすところを見^みた。なにか、黒^{くろ}いものがうごいてる。

「カラスだ！」

「そうよ、鳥^{とり}だわっ！」

ANKAが走^{はし}りよる。怖^{こわ}くないの？

「見^みて、ユリイカ。脚^{あし}を折^おられてる！」

そういうながら、ANKAは、小^こ枝^{えだ}を折^おれた脚^{あし}の添^そえ木^ぎにし、ハシカチーフを出^だして、しぼる。

力^{ちから}を失^{うしな}つてゐたカラスは抵抗^{ていこう}もしない。おとなしく、されるがままになつてゐた。

けど、双^{そう}眸^{ぼう}がするどいよ……

「さあ、これで、いいわ」

ANKAがそういうと、カラスはいちどだけ、アーと鳴^ないた。そして、いきなり飛^とび上^あがり、木^きの枝^{えだ}に生^はえたパレス・アテナの胸^{きょう}像^{ざう}のあたまに、とまる。

あれ？

カラスを眼で追っていて、はじめて気がついた。

胸像のわきに、パンクふうの男が坐つてた。1977年のジョニー・

ロットンふう、寝ぐせのよいな金髪のスパイキーヘア。丸い小さなサングラスに、やぶれを安全ピンで留めた長そでTシャツ、南京錠のネックレスに、鋏つきリストバンド、ピアスも安全ピンだ。

「つか、寒くねーの？」

カラスが囁れた鳴き声を上げる。吹雪に、かき消された声で、

「ネヴァー・モアー。『午前5時 セ・リイヤ村発 シーレオーノ行』。ネヴァー・モアー」

そのさびしく、悲しげな鳴き声に、あたし、まぢ怖くて泣いた。

パンク男が哄笑する。

ANKAがあたしをしかった。

「泣くな！ きいてた？ これよ。」

『午前5時 セ・リイヤ村発 シーレオーノ行』よ！

わかる？

これに、乗らなくっちゃ。

これで、いくべき場所へ、いくんだわ」

「そうさ。」

どっちにしろ、それしかないだろ」

ジョニーもどきがあざけるように、そう喚いた。

「5時までなんて、明日、学校、いけなくなっちゃうよ。」

「だいたい、いくべき場所って、どこのこと？」

「ばか。もどったとき、時間なんか、ほとんど、経ってないわ。時間も、脳内でつくられているのよ。」

「ってゆーか、あんた、さいしよに、いくべき場所を知らないの？
ったくう、注意書きも、説明も、読んでないのねー」

「……はい。」

パンクふうが爆笑し、枝から墜ちる。ANKAは、そんなの気にとめない。

「IEで時間をすごしても、もどるときには、入ったときと同じく

らしい時刻にもどれるのよ。

ともかく、いまは、これ以上、説明はしてらんない！

説明なら、わたしが読んでるから、だいじょうぶよ。

さ、ともかく、風にむかっていくよ！ いいね！」

「そうさ、それしかない。

あたまで考えたってダメさ。考えって、なんだあ？ 俺あ、おバ

カだからさー。

あはは、あはは、あははははっ」

雪まみれで、起き上がったパンクが嗤いながら、そういう。

あたしも、シカトした。

「ANKA、もう少し、くつついて歩こう。あたしのほうがあった

かいからさ！」

「いいから！ いくのよ」

金パツがあたしたちを見おくって、手をふる。

「あはは、あははは、がんばれよ。俺あ、ハロー蜜斗ってんだ。ここ

じゃ、有名だぜ。ハハ、いくんだ、それっきやねー、なんもねー、色

即是空さ。ぎやうてい、ぎやうてい、あハハハ！

ちやあナー」

なんなの？

雪をふみしめ、歩く。風のせいで、すすみにくい。ふんばる。く

いしぼる歯がガタガタ震え、うまくかみあわさらない。

けど、変なことに、気がついた。

「ねえ、ANKA、あたし、すごい空腹なんだけど、なんでかしら。

さっき家で、いっぱい、ご飯食べたばかりなのに」

「すべてがゼロから、はじまるのよ。とーぜん、さいしよは、なー

ンにも食べてない状態から、はじまるのよ」

「さいあくーう！」

「空腹も、脳でつくられるって、いったでしょう。いまが実践学習

ね」

「ゼロからって、そんなとこまで、やるんだあ。こまかいっつか、

きっちりしてんねー。

てか、経験^{けいけん}って、ほんとに、事実^{じじつ}にカンケイなく、つくられたものなんだねー。

でも、ハダカの出発^{しゅっぱつ}じゃなくて、よかったわ。防寒具^{ぼうかんぐ}はゆるされてるから」

「そーでもないよ。夏服^{なつふく}で来る人間^{にんげん}だって、たくさん、いるらしいから。そういう人^{ひと}は、即リタイア。

あんたの、知恵^{ちえ}の勝利^{しょうり}、ってことよ」

「ANKAは、なんで、冬の装備^{ふうび}だったの？」

「事前調査^{じぜんちようさ}」

「ひどーい、なんで、教えてくんなかったのお！」

「それじゃ、ゲームにならないわ。でも、ヒントはあげたはずよ。ほんと、違反^{いはん}なんだからー。

ねえ、ちなみに、あんた、キャラクター、なに、えらんだの？」

「キャラ？ あー、あれよ、えいち？」

「エイチ？ あ、叡智^{えいち}ね。

その影響^{えいきよう}、あるのかもね、あんたが正しい選択^{ただせんたく}をしたのは」
そうか。

でも、考えてみれば、ANKAのおかげ。あたし、ぜんぜん、自^ジ立^{リッ}してない。

「知恵^{ちえ}が武器^{ぶき}だって、教えてくれたからだよ」

「そーでもない。

きく耳^{みみ}があったからよ。それも、だいじなこと。

うぬぼれちゃ、ダメ、ってことよ。

他人^{たにん}の意見^{いけん}に、かんたんに、左右^{さゆう}されちゃうのも、ムノウだけどねー」

「ANKAから、そういうこと、きくとは、おもわなかったわ」

「どういう意味^{いみ}？ わたしだって、他人^{たにん}の意見^{いけん}、きくわよ。

だれだって、さいしよは、だれかにたよるものなのよ。

赤ちゃん^{あか}は、1人^{ひとり}では、生きていけないわ」

って、いつているうちに、森をぬけて、登りはじめている。なにも、風をさえぎるものがなく、雪はカミソリだ。

あっちこっちから、ふいてくる風で、あたしも、ANKAも、もう、しゃべってなんか、いられない。斜面の角度が、さらに、きつくなった上に、岩だらけに変わった。

これ、登るのっ？ ……なんて、もう、きかない。きくゆとりがない。

けど、あたしにも、ANKAにも、これなんだっていう実感があつた。あえて、困難な道をえらぶのが正解なんだっていう感覚をつかんでいた。

けど、ハンパじゃない。すすむほど、ハードさが増す。ケータイを見ると、あたしたち、出発してから、まだ、30分くらいだ……

信じられない！ ちょー疲れまくり、へロへロで、足震えてるし、息きれてるのに！

「ANKA、少し休もうよ、あんた、もう、限界っぽいよ」

弱々しい眼で、ANKAがあたしを見た。あたし、ぞつとした。

ANKAがこんなふうになるなんて……

「そうね。少し休もうか、ユリイカ」

あたしたちは、岩陰の雪を少しどけて、そこに、2人でくつついて、丸まった。さ、さ、さ、さ、さ。あたし、じぶんの上着を、ANKAに着せた。懐炉があるから、上着なくても、あたしは、だいじょーぶだったから。

ANKAは、さいしよ、拒否したけど、抵抗する気力も、すでに、うすれているようだった。

「いいわよ、しかたないね。でも、それは、あんたにとって、いいことよ。」

この世界では、他人のために、じぶんを犠牲にすると、クドクになって、かならず実るから。現実とは、ぜんぜん、ちがうのよ。

正しい行為がむくわれる、かならず」

見ると、たしかに、あたし、QDQ:3になつて……

あたしたちは、歩いた時間よりも、はるかに長い時間、休んだ。
震えが止まらない。空腹だし、手足の感覚もない。意識、もうろ
うだった。

疲れ切ったあたしのあたまのなかに、コウキくんのすがた。ぼん
やり、泛かぶ。そして、笑うアイちゃんの顔が……。

あたしの眼に、うつすら涙がこみ上げて、頬の上で、凍って、か
たまる。

それを手ではらった。元氣を出そう、つていうか、いま、眼のま
えの事実を見るんだよ、ユリイカ。友だちが死にそうじゃないか。

「ねえ、ANKAったら、こういうときつて、眠っちゃ、いけない
んだよね？」

「そうだよ、ユリイカ。眠らないで、死ぬわ。」

もし、あんたが死んじゃったら」

そういうANKAのほうが眠りそうだった。あたし、ANKAに
むかって、ゆり起すように、

「ねえ、なに？ あたしが死んだら、なんなの？」

「ふふ。」

あんたが死んだらね……なんでもないよ。だって、そんなことあ
りえないもの。

わたしが、ぜったい、死なせやしないよ」

キミのほうがヤバそうだよ。

「ほらあ、ANKA、寝ちゃダメ、ダメだったら！」

「わかってるよ、ちよつと、眼をつぶらせて」

「ばかあ、それがだめなんじゃないか！」

あたし、ANKAをひっぱいた。

「ありがとう。でも、だいじようぶ、眠らないよ」

ぜんぜん、眠りそうじゃなか。

「ねえ、ANKA、話してよ、あたし、説明読んでないからさ。」

これから列車に乗って、あたしたち、どこへいくの？」

ANKAが力なく、微笑む。

「学校だよ。」

この世界で生きるルールや、能力をやしなうための、ほんとうに
ひつような知識をえるための、学校。

アカデミア、つて、いうんだ」

「そーなんだ。どういう学校なの。ハリー・ポッターの学校みたいな
なとこかな」

いっしょうけんめい、あたしは、話題をつなこうとする。

けど、ANKAのこたえ、チグハグだった。

「あー、そうだ。わすれてたよー。」

ねえ、わたしのバッグのなかを見て。食べ物があるはずよ。底の
部分のひもをひっぱると、あったまるやつ。

そう、それ。2人で、わけて食べよう」

あたし、食糧のよういまで、考えてなかった。智慧って、だい
じ！

「あ、あった、あったよ、缶詰。」

おもしろい、こんなに、かるい缶詰って、あるんだ。うれしい、
ビーフ・シチューよ、しかも、2人ぶん。

：あ、このひもね」

ひっぱった。すぐあったまる。食べた。

「きやあ、ANKA、あったかいよお。ありがとう。すごい、おい
しいよ。手が、手があったまって、痛いくらい」

「そう。よかった」

「うん、すつげえ、うれしい」

食べ物、もらうってことが、こんなに、うれしかったことはな
かった。こんなにも、ありがたいとおもったことは、いままでにな
かった。

ふと、気がついて、手をとめた。

「ANKA、いいの？　ほんとほ、これ、あんたのだよ」

「ばかいわないで。1人じゃ、おいしくないわ。ふふ。わたしにも、
クドクつませてよ」

そっかー。ちゃー、えんりょなく……食べたなら、元気になった。
ANKAも、ODO:3になってる。

あたしは、ANKAと、ずっと、話しつづけた。女どうしだから、
できる技。

「さあ、ユリイカ、もう、午後9時半よ。いかなくつちや。がんば
ろ」

ふんばって、立ち上がる。

うらあつ。

か、からだ、重い。

体重のせいでも、装備のせいでもない。

疲れてるんだ。まちで。

でも、歩いた。

言葉でいうのは、かんたん。だけど、実行するのは、ぜんぜん、
かんたんじゃない。瞬間的には、がんばろー、って燃ゆる。

けど、雪風にぶたれて、凍えて、くたびれて、10秒後に、もう、

いや、って、さけびたくなる。意志って、いったい、ナンなの？

でも、歩くしかない。

歩いた。

お家に帰りたいよ。でも、歩いた。

なんとも、さけば、ユリイカ。ともかく、歩け。それしかない。

歩く。もう、へとへと。歩く。もー、だめ。ムリっ！ 歩く。さぶ

い、死んちゃう。歩く。足がうごかない、疲れた。歩く。もう、い

いよ、たおれよう。歩く。なにをほざいてもいいから、歩け。歩く。

選択肢はない。歩く。たとえ、理不尽であっても、ほかに道はない。

歩く。歩くしかない。

あれ？

「望み抱くがゆえ、人は、絶望に堕ちる。

真に生を諦めた者は、あえて死を望まない」

フードつきのマントをはおった人がこの猛吹雪のなかにいた。

あたまにも、肩にも、雪をつもらせて、なかば埋もれ、しずかに

歌^{うた}っている。

廃墟^{はいきよ}になった古い教会^{きょうかい}できく、亡霊^{ぼうれい}の讚美歌^{さんびか}のような、幽^{かす}かな玄^{くら}いしらべだった。

あたしたち、立ち止^{たど}まった。

A N K A が説明^{せつめい}している、

「この人は、自由意志^{じゆういし}設定^{しやうてい}のキャラね。環境^{かんきやうてきじんぶつ}的人物^{じんぶつ}よ」

「あ、あのー、日本語^{にほんご}で、プリーズ」

「つまりね、彼は、アバター^{かれ}じゃないわ。

だれかが操作^{そうさ}しているキャラじゃなくて、川^{かわ}や、海^{うみ}の波^{なみ}や、風^{かぜ}と
同じ^{おな}。

ほら、この吹雪^{ふぶき}と同じで、I E のなかを自動^{じどう}的にうごいているの
よ。

プログラムで、うごくキャラだけど、まるで、じぶんの意志^{いし}があ
るみたいに見える^みでしょ？

だから、アバターとの区別^{くべつ}はつきにくいわ」

：：んー。わかったことにしておこう。

「で、これ、なにしてるの？」

あたし、A N K A にきいた。

「ふんいきづくり：：かな？」

「：：：：：。じ、じゃ、いこうか？」

でも、状況^{じやうきやう}は容赦^{ようしや}なく、さらに、悪化^{あくか}していった。

あたしたちが登^{のぼ}りはじめた斜面^{しゃめん}は、もう、斜面^{しゃめん}なんかじゃない。

アルプス山脈^{さんみやく}の絶壁^{ぜつぺき}を登^{のぼ}るみたいだった。

風^{かぜ}があたしたちをもぎとって、下^{した}へ突きおとそうとする。まぢ怖^{こわ}
い。

あたしたち、なんども、休^{やす}んだ。3分^{ぶん}くらい登^{のぼ}って、10分^{ぶん}くらい
休^{やす}んだ。

登^{のぼ}れば登^{のぼ}るほど、雪^{ゆき}がすごくなっていて、なんにも見^みえない。息^{いき}
もできない。

酷^{ひど}すぎるよ。殺^{ころ}す気^きかつつーの？

ぶちギレそーになる。

これで、まち、ほんとに、帰れんのかよ？

でも、ANKAは、ふしぎと元気が復活してて、氣力に満ちている。あ、あんた、超人だ。あたし、もう、ダメっぽい……。

手がこごえる。

ぶあつい手袋をしていても、凍えて、かじかんでる。

力が入らない。

疲労困憊、って、やつだった。

「ANKAー、もおー、だめー、死んじゃうよ。

おっこつちやうよーっ！」

「がんばれっ、集中してっ、あんたの命を燃やすのよ」

なに、それ？ どーゆーこと？ マンガじゃないのよ。

でも、ぜんぶ、これ、バーチャルなのよね。現実じゃない。

理不尽で、弱い者いじめする、糞ったれの現実じゃねーのよね。

よおーし。

えいち、あたしに教えて、どーしたら、命は燃えるの？ エイチ、

あたしをおもいどおり、生きさせて！ ここは、正義でしょ？ あ

たし、なんにも、わるいことしてないわ！ どうか、友だちを、た

すけて！ 彼女の装備、あたしのより、うすいのよっ！ このお願い

が正しくないってんなら、てめえら、ぜんぶ、おかしい。死んじま

ええええー！

ところで、そうさげびながら、あたしは、固く眼をつぶった。

まっ暗だった。

その闇の底に、とおいところに、かすかに光る星のような、小さ

な粒を感じた。

小さいけれど、はげしさのある、強い光だった。

だんだん、ちかづいて、大きくなるように見えた。

臍下丹田。

おへその下の、おなかのところのこと。

そこに、青白い炎を感じた。

奥深く、純白にかがやく、まばゆい金剛のよう。

じぶんのからだがなくなったように感じた。えんりよしなくていい。

ANKAの手をひっぱって、がむしゃらに登るじぶんを、あたしは、映画でも観るように、じぶんのなから、見ていた。

皮膚を突き破り、筋肉をひき裂き、骨を砕きそうなぐらい、ふんばって、登る。

じぶんを超えて、じぶんのあたまのてっぺんから、じぶんじしんが飛び出そうなぐらい。歯をくいしばる。じぶんのあたまを、ふんづけて、上へ登ろうとするかのように。

気がついたら、あたしたち、山頂にいた。

Anka QDQ : 5 Eureka QDQ : 5

クドクが上がっていた。少し、うれしーけど、どーでもいい。もー、疲れまくり。ぜんぜん、力入らないし、いくら息しても、苦しい。

見上げると、空はうつすら、あかるくなっていて、すぐ上に、雪雲が見える。あたしたちを威嚇するように、おおいかぶさっていた。

すごいスピードで、あたしたちの上を、すぎ去っていく、とてつもなく大きな生き物に見える。怖い。

風は風というより、空が滝になって、たたきつけているようだった。

小さなあたしたちを、怒涛で、こなごなにしそうだった。氷の雪は服をつらぬきとおし、あたしたちをひき裂き、ちりぢりにしてしまいそうだ。

はるかな下のほうに、小さな村と駅とが見えている。あそこまで、3百メートルくらいかなあ……。

まだ若かった小学生のころ、遠足で登った又鋸山から見下ろしたときの、距離感と似ていたから、そうおもった。

「ハア、ハア、あ、あれかあ」

あたし、あえぎながら、つぶやく。

ANKAがするどころも、力ちからなく、

「そうだよ、あれだよ。さあ、いこう、ユリイカ。いま、なん時じかな？」

「午前3時ごぜんちよつとまえかな。冬ふゆのくせに、あかるくなるのはやいね。ほんと、3時じかなあ」

「わたしのケータイも、3時じ2分ふんまえ。

あつてゐるね。

日本人にほんじんだけのサイトじゃないから、12月がつの日の出ひがおそいとは、かぎらないよ。南半球は12月が夏よ」

「わあーった。けど、あと2時間じかんで、あそこまで、いけるの？。

まにあうかなー」

「まにあわせるんだよ。

すべては意志いしと正しい動機どうきによって決きまる。それが真しんの自由じゆうだ」
うーん、いうこと、りっぱなんだけど、ANKA……

「ねえ、ANKAは、キャラクターで、なにをえらんだわけ？」

「軍武力ぐんぶりよくよ。

あんたと同じおなじじゃ、意味いみないでしょ？」

「てか、あたしがなにえらぶか、読よんでたつてわけえ？」

「ダルいこと考かんがえてないで、ユリイカ。

行動こうどうあるのみよ、さあ」

いきなり、ANKAがジャンプする。

うつそおー、まぢかよ。

こんどは、山やまの急斜面きゅうしやめんを、滑降かつこうするっていうのっ！

ANKAは、上着うわぎの背うしろのすそを股またのあいだからつかんで、ソリすりみ
たいに、うまく滑すべつてゐる。

信じしんじらない。映画えいがじゃん。ぜったい、クソツたれの現実げんじつじゃ、

ありえないとおもう。

「えーい、どうせ、バーチャルだぜーい」

あたしも、マネする。お尻しりをソリにして、雪蹴散ゆきけちらし、滑り降すべおり
る。

すごい、景色がびゅんびゅん飛んでいく。すごいスピードだよ、これ。まぢ止まれんの？

斜面の凹凸のせいで、ところどころ、派手にジャンプする。キャーキャーキャアーツ！

こわい、こわい、こわい、こおえええーよっ！

「もうすぐ、平地に、村に着くわっ、ユリイカがんばって！」

「って、てゅーかつ、そのまえに森があるんですけどーっ」
村のまえに、黒々した針葉樹の林があった。

「ぶつかるよーっ」

ANKAがふりむかず、大声でいう、

「わたしをよく見て！ 重心移動で、左右にかわすのよっ。イメージして。強く求めれば、なせるわ！」

ANKAが林に突っこむ。ああ、ぶつかる！

彼女は、1本の大杉を、左にかわした。

すそを右がわに、ひっぱり上げて、左に重心をかたむけ、左にまがった。

こんどは、すその左がわを、ひっぱる。右にまがった。

す、すごい。あたしも、イメージ、ああ、イメージっ、わいてきてよ！ あ、来たあー。

あたしも、林に突入。

「うわああああああああああああああああああっ！」
1本1本の木が眼にとまらない。すうんごおいスピード！ なんと、よけられるか、よくわかんない。

けど、奇跡のように、木々をぬける。スリル、ちょーすげエー。あっ！ あっ！ あああっ！ おおっと……

やったー、林を、ぬけたあー。

でも、あ、こんどは、あ、あっ、む、村だー！ 家にぶつかるよ！
「どいてーっ！」

ANKAがさけぶ。

サイロの扉をあけて、藁草をとり出そうとしていたおじいさんの

背^せなかにぶつかりそうだった！

「どいて！ どいて！ どけーっ」

あたしも、絶叫^{ぜっきよう}する。

ころがるように、身^みをかわすおじいさん（意外^{いがい}に身^みがるジャン？）、
あたしたちは、ひらいたままの扉^{とびら}から、藁^{わら}草^{くさ}の山^{やま}に突^つっこむ。ずば
おっこああん、ずん！

「ふわー」

藁^{わら}の山^{やま}から、もがいて、顔^{かお}を出^だす。

ANKAも、出^でてきた。

「ユリイカ、だいじようぶ？」

「あたし、無事^{ぶじ}よ。ANKAは？」

「どうやら、クリアしたみたいね、わたしたち。

さ、キップ買^かうわよ」

キ、キミって……、タフでなくちや、生^いきていけナイ。

4 エリコとミーシャ!! & イース ☆シ

いきなし、猛^{もう}スピードで藁^{わら}に突^つこんで、大^{おお}きな音^{おと}を立てた、あ
たしたちを、しんぱいそーに見^みてるおじいさんに、「ごめんなさい」
とだけ、いいのこし、走^{はし}る、走^{はし}る。

氣^きがつけば、風^{かぜ}はすでに弱^{よわ}くなって、雪^{ゆき}が降^ふりしきってるだけだ
った。

茅^{かや}ぶきの屋^や根^ねと石^{いし}づみの壁^{かべ}の村^{むら}は小^{ちい}さくて、うす闇^{やみ}のなかでも、
すぐ^{えきしや}に駅^み舎^みが見^みつけられた。

午前^{ごぜん}3時^じ36分^{ぶん}。楽^{らく}勝^{しょう}だ！

駅^{えき}は古^{ふる}くて田^{いな}舎^なの無^む人^{じん}駅^{えき}みたいだったけど、キップ売^うり場^ばも改^{かい}札^{さつ}
もあつて、駅^{えき}員^{いん}さんもいた。

そのまえで、必^{ひつ}死^しになつて、荷^{にもつ}物をひっくりかえし、なにかをさ
がしまくってる女^{おんな}の子^こがいた。

「どーしたの？」

あたし、おもわず、きいちゃった。

その子^こは、キツと、にらむように、あたしを見^み上げた。

「ないのよ！」

「なにが？」

「お金^{かね}に決^きまってんでしょ！」

「決^きまっては、いないとおもうけど」

「どーでも、いいわよ。あんた、ちよつと、ウザくない？」

そこにANKAが来^きた。

「ユリイカ、なにしてんの。キップ買^かわなきや、乗^のれないでしょ。

いいから、財布^{さいふ}よこしなさい。

買^かってきてあげるわ」

その子^この眼^めがかがやいた。

「ねえ、エリコのも、買^かってきて！」

ANKAが怪訝^{けげん}な顔^{かお}でにらむ。

「いいけど。でも、お金^{かね}くれる？」

エリコがこまった顔^{かお}をつくる。

「ねー、少し^{すこ}貸^かしてくんない？」

「少し^{すこ}して、いくら？」

「キップ代^{だい}全^{ぜん}額^{がく}」

ANKAがおもしろがってるような表情^{ひょうじょう}で、いった。

「もちろん、貸^かしても、いいわ。

返^{かえ}したくないなら、返^{かえ}さなくてもね。

あんたも、ここのルールは、とーぜん、知^しってるわよね？」

エリコがふくれっツラする。

「ばかにしないで。知^しってるわよ。

クドクが減^へるわ。でもさ、しかたないじゃん。またとり返^{かえ}せばいいのよ」

「OK！

じゃあ、いっしょにいこうか。

ユリイカ、あんたの財布^{さいふ}からも、この子^このぶん、出^だしとくからね」

「ええ！　なんでー、ANKA」

「ばか、あんたも、わかってないの？」

クドクよ、クドクのほうがお金より価値があるの。

わかった？」

あたしとANKAは、防寒具やらをぬぎ、折りたたんであったバッグをひろげて、それらをしまい、エリコといっしよに、その荷物（にもつ）をひきずりながら、キップ売り場の窓口（まどぐち）へいく。

デニムを着（き）た、太（ふと）ったおじさんが背（せ）をむけて、だるまストーブにあたっていた。

「キップください」

大きな声（こえ）でよびかけるエリコ。あんた、じぶんの金（かね）じゃないでしょー。

「シールオーノ行（いき）、3枚（まい）ね。」

特等（とくとう）にしてよ、空（あ）いてるわよね？」

ふりむいたおじさんは、赤鼻（あかはな）に小さなメガネをのせている。顔を（かお）しかめて、小さな紙（ち）きれをにらむ。白（しろ）い鬚（ひげ）をなでる。

「空（あ）いてるよーじゃな。アカデミアにいくのかい、お嬢（じょう）さんがた」「とーぜんよ」

「そうかい、がんばってな。ほら、3枚（まい）」

エリコが得意（とくい）げに、キップをあたしたちにくばった。

そして、あたしとANKAは、顔（かお）を見あわせる。プつ。ふき出して笑（わら）う。

「なによ」

エリコが不満（ふまん）げ。あたしも、いってやったよ、

「なんでもないわ、あきれただけよ、あんた、ある意味（い）すごい」

AnkaQDQ : 6 EurekaQDQ : 6 EricoQDQ : 3

そんなあたしたちのやりとりなんか無視（むし）して、ANKAがホームのようすを改札口（かいさつぐち）からうかがう。閑散（かんさん）、風（かぜ）ふくだけで、さびしげだ。いう、

「さ、いくよ。ここじゃ、寒（さむ）すぎるわ。ホームにいつでも、しょー

がないしね。

バルで、コーヒーでも、飲みましょう。ひらいてれば、だけど」

「バル？」

あたし、きいちゃった。

エリコがエラソーに、うんちく、

「あー、そんなことも、知らないの？ 勉強不足ね。」

バル、っていうのはね、どこの村や町にも、かならず1軒はある
立ち飲み食いの、安い店で、都会なら、街区ごとにあるわ。

国や地方によっては、バルっていたり、パブっていたりするのよ」

「へー。」

エリコ、バカそうに見えるけど、勉強したんだ」

「ユリイカ、っていったつけ？ あんたに、いわれたくないわ」

ANKAが口をはさみ、

「あそこに、あるわ、やってるみたい。こんなに、はやい時間から、
ありがたいわ」

あたしたちは、雪降りしきるなか、震えながら、店に飛びこんだ。
いかにも田舎っぽい、つか、農家の納屋に、カウンターがある
みたい。

朝、仕事のまえに1杯やってる農夫のおじさんたちがなんかい
る。

あたし、入ってびっくり。だって、床はまるめたナプキンやタバ
コの吸い殻だらけ。サイアクじゃーん。

「あーら、いいお店ね」

エリコが得意げにいう。

「どーゆーことよ」

あたし、ついムツとなる。

ANKAがため息しながら、説明、

「あんたら、猿と犬みたいね。レベル同じで、ちようどいいってこ
とかしら？」

ねえ、ユリイカ、バルでは、ゴミは床に捨てていいことになってるのよ。

繁盛してる店ほど、ゴミだらけなわけ」

「へー」

うす暗くて、黒っぽい、丸太小屋みたいな店内で、あたしら女子3人は、奇異の眼で見られた。とくに、雪まみれのあたしとANKAとは、げんんな面持ちで、じっと見られた。

カウンターのむこうに、背が高く、やせた、気の弱そうな男と、小柄で小太り、頬がやつやつやして血色がいい男とがいて、上機嫌にお客としやべってる。

「いらっしやい、お嬢さんがた。なんにしましょうか」

やせた人がやさしげに注文をきいた。つやつやした頬の人は、ニコニコしていう、

「うちのチーズは最高だよ。ワインは、ちよつとムリかな、お嬢ちゃんがた。」

おれたち、いつも週末は、あっちこちの農家をまわって、それこそ、山も越えてね、秘蔵のワインや、チーズを見つけ出して買いつける、それがしゅみななのさ」

しあわせそうに笑った。少し離れた席の農夫がふいっと、よこをむく。小声で、ぶつぶつぶやくのが、あたしの耳にもきこえた。

「けっ、このご時勢に、のんきな暮らしぶりじゃねえーか。さぞかし儲けてんだろおーなあ、へっ」

ANKAが顔を声のほうへむけ、

「変ね」

ポツリといってから、顔をもどし、注文をはじめた。ホット・ミルクをたのんだ。あたしも、同じにする。エリコが氣どった口調で、ブラックを注文した。

「あんたら、ガキねえ」

なまいきなこといったエリコに、ANKAが忠告していう、

「からだをあつためるものを飲んだほうがいいわよ。そんなんじや、

おなかも、すくよ」

「ふーん」

「ねえ、あんたさー、なんで、そーゆー態度たいどなわけ？」

あたし、いわずにいられない。

「そーゆー態度たいどって、どーゆー態度たいどよ」

「てゆーか、お金かねなくて、こまってたくせに、えらそーってことよ」

「あーら、あんたたちに、クドクをつませてあげたんじゃない。じぶんのポイントぎせいを犠牲ぎせいにしてさ」

ANKAがからかうように、

「まあ、そうとも、いえるわね。ところで、あんた、1人ひとりで、ここまで来たの？　たいしたもんね、女おんなの子、独りひとで」

エリコが鼻はなの穴あなをふくらませる。

「まあね、あたしって、けっこう、かしこいから、しょーがないじやん。

あんたらも、ケータイあるでしょう？　雪上せつじょうタクシーよべばよかったのよ。

運転手うんでんしゅは、雪豹ゆきひょうくん。攻略本こうりやくほんにも、書いてあったわ」

あたし、すなおに感心かんしんしたけど、ANKAは、けらけら笑わらって、

「それじゃあ、お金かねもないわね。しかも、マイナス・ポイントよ。あんたの攻略本こうりやくほん、よっぱど、安やすかったみたいね」

「知らないわ。彼氏かれしが見みせてくれたんだもん」

こいつ、彼氏かれしいるんだー。あたし、まぢムツとした。少しすこ哀かなしかった。ANKAが素知そしらぬ顔かおするという、

「そんな男おとことは、わかれるべきね。バカとつきあっても、いいことないわ」

意外いがいにも、エリコが真顔まがおでうなずき、

「そうね、ほんとだわ。もう、アイツとは、終おわりね。ふん。もっと、いい男おとこにするわ。かしこいやつにね」

あたし、よけいムカつくんだケド。そんなに、えらべるワケ？　「あ、そー、そー、じつは、わたし、独りひとじゃないんだよ、厳密げんみつに

いえばねー」

まちで、いちいちムカつくんだケド？ だから、行ってやったよ、

「なに、そのゲンミツにいうと、って。

1人ひとりなの、そうじゃないの、どっちよ」

さげすむような眼めで、エリコがあたしを見たみ。

「ニュアンスってもンを理解りかいできないのね？ まあ、事実上じじつじょう、わたし1人ひとりみたいなもんだった、ってことよ。

ぜんぜん、たよりない子こでさー、ロリ系けいの夏服なつぷくで来ちやったのよね。 っていうか、装備そうびに金かねかけなさすぎ、ってやつよ。

タクシー代、わり勘かんにしたんだけどさ、彼女、わたしとちがって、装備品そうびひん買ってないぶん、列車代れつしゃだいがあつてさ。

ミーシャだけ列車れつしゃに乗のせて、わたしは、奇跡きせきを信じ、お金かねをさがしてたってわけよ」

「あんた、それで、タクシーに……」

あたし、少しすここいつを見直みなおした。だから、あたしたちに、救すくわれたのかも。 そっかー。これがIEのからくりなんだ。

「まあ、列車代れつしゃだいくらい、ギリギリのこせると、おもったんだけどね。 まー、わたしでも、ちよつとぐらい、計算けいさんミスはするわよ」

確認かくにんするような上眼うわめづかいで、得意とくいげにこちらを見るエリコ。

「どお、謙虚けんきょでしょ？」

やつぱ、見直みなおさなくて、いいか……。 ともかく、動機どうきはどうでも、いいんだ。 よいことをすれば、ここでは。 あたしらが返事へんじしないのも気きにせず、さらに、エリコ・ペースでしゃべる、

「ねえ、それよりさ、とりあえずメアド交換こうかんしない？ 腕うで、見みせてよ。

エンディング・コンペティション・バージョン・フォー
A'ndoi - C'version04、へー、Super:Hyp - iz277やん。

ちよつと、リスペクトかなー。

スマートフォンスマートフォンのF1マシンだもんね。 へー。

あ、でも、メアド、ダサイ。 だって、そうじゃん。 ほら、わたしの、見みて、見みて」

「さあ、もういいかしら。いくわよ、時間だし」

ANKAがいった。

時間になって、プラットホームにいくと、蒸気上げる機関車が待っていた。寝台車や、食堂車がある。豪華にデザインされたロゴが車体に飾られている。

こんな、田舎の駅に、こんなに、りっぱな列車って、すごく変だよ。

あたしたちは、ポーターに荷物をはこんでもらい、客車のまへのステップに立つ。あたし、きれいに黒く塗られた鉄のステップのまえで、うきうき。

「なんか、出発のときの、みじめな状態がウソみたいだね」

意気こんで上がろうとするあたしは、出て来た女の子と、ぶつかった。

「キヤッ！」

「ごめんなさい、急いだのー」

それがミーシャだった。

あたしたちは、特等の客室(コンパートメント)に4人が入った。特等みんな、定員2名のコンパートメントだ。ミーシャは、エリコがいつ来てもいいように、ここをえらんでいたらしい。

あたしたちは、車掌にたのんで、窓口で買ってあった指定券を、その客室に替えてもらい、はんぶん、お金をはらいもどしてもらって、4人仲よく旅することにした。小さな女の子ばかりだから、これでじゅうぶんだ。

コンパートメントはトイレや化粧室をかねた洗面室や、シャワー室もついていた。マホガニーの小テーブルもきれいだ。

むかいあったベンチシートを伸ばして、2人ぶんのベッドにするしくみだけど、サイズによゆうがあるから、2人で1つのベッドに寝るくらいが、あたしたちには、ちょうど、よかった。

ミーシャは、金髪をたてロールにした、かわいい、おとなしそうな子で、大きな碧い眼に涙を、いっぱい、ためている。

「よかったー。エリコったら、ぜんぜん、わたしのいうこと、きいてくれないの。お金のことは、これから、がんばるから、2人でいいこう、っていったのに」

「ふん。あんた、わたしはね、お金なんかなくても、どおーにでもなるわ。じっさい、こうして、どうにかなったじゃん。

あんたとは、ちがうの！ あんたこそ、せめて、お金でもなきや、とうてい、生きてはいけないでしょう。このIEですら、あんたには、ムリよ」

むかいあわせのベンチシート、2人で1つに坐ってる。

部屋はあたたかく、椅子の生地は上質でやわらかく、ここちよい。壁はマホガニーで、木目が美しい。室内のあかりは金でメッキされたランプだ。

あたしは、インテリアを、うつとりながめながら、さっきまでのつらい環境との、あまりのちがいに、夢きぶん。まかふしぎな感覚だった。

なんとなく、よゆうのせいか、気になってケータイ出す。なんで人間ってしあわせのさいちゆうに、わざわざ不幸をよびさましたがるんだろー。やっちゃいけないとおもうと、やっちゃうみたいなの……。わたし、学校の裏サイトを見る。

あいかわらず、たたかれてんなー。

だれだか、わかるよ。ま、いいーし。死ねっていわれたからって、死ぬ義務はない。てか、死んでも、生き返ってやるわ。

人は、みんな、じぶんのつごうで、かってなことをほざいてるダメだ。

あーあ、現実って、なんで、まちウゼーの？ 人間の設定にあわせないならなくなれよ。つーか、なんで人間の設定は現実にあわせたいの？

現実って、けっきよく、ANKAが教えてくれたように、脳内の信号なんでしょ？ だったら、じぶんのつごういいようになってなきや、おかしいんじゃないの？

で、ふと、ANKAを見る。

ANKAは、窓まどわくに肘ひじを突ついて、ホームのようすをながめていた。

ともかく、この人ひとについていけば、だいじょうぶな気きがする。会あえてよかったよ……

ミーシャも窓まどがわ。ANKAとむかいあわせ。あたしとエリコが出口でぐちがわで、むかいあつてる。

ANKAがふと、いう、

「ねえ、あなたたちのキャラは、なに？」

「きやら、ですか？」

ミーシャがおずおず、問とい返かえす。

「あら、あんた、基本設定きほんせつていのキャラクターのことよ、わたしはねー、聖性せいせい！」

エリコがいう。

「まぢイかよ！」

あたし、いっちゃった。

「なに、それえ！ どーゆー意味いみ？」

ANKAは、相手あいてにせず、冷静れいせいに、

「で、ミーシャ、あなたは？」

「運命うんめい、です」

うーん、わかる気きもする……。しかし、ヒトのことはいえないか、あたし。

「ちよっと待まって、ねえ、じゃあ、あんたは、なんなのよ、ユリイカ」

「う、うーん……」

「ちよっとーっ、いいなさいよおー」

「うん。……叡智えいち、かな？」

エリコの大爆笑だいはくしょう。

「ギャハハハハハハ、ちょ、ちよっと、あんた、わたし、殺ころす気き？
アハハハハハ！」

A N K Aは、そんなの無視で、

「ねえ。これって、ぐうぜんじゃないわ」

あたし、意味わかんなくて、

「え、なんで？ 4つのキャラがそろったから？」

エリコが腕を組み、

「うーん、そうかも。たしかに各キャラがそろえば、漏れなし、か
んぺきって、いえるわよねー」

キョトンとしてたミーシャが、

「わたしたち、すごくいい組みあわせてこと？ 4人でチームに
なれば」

「そうかも」

A N K Aは、うなずいたが、まだなにか考えていた。

エリコがいう、

「あと、1人よね。きつと、どこかでめぐり会うんだわ。ね、ね、
どこだとおもう」

「あたしに、わかるわけないでしょ！ A N K Aにきいてよ。だい
たい、あんたとしゃべるのって、ほんと、めんどくさいのよね」

「あーら、ぐうぜんね、同感だわ。わたしも、そーおもってたトコ
よっ！」

A N K Aがうんざりした顔で、

「いいかげんにしてくれない？ まじ、疲れるわ」

列車は蒸気を噴いてさけびを上げ、走り出した。

雪の山岳を除雪された線路がつづく。

雪をかぶった岩ばかりの風景だ。列車は崖の壁を削ってつくられ
た路にしかれたレールをくだっていた。

だから右がわはせまるような大岩だらけだけど、左がわはとおく
まで風景が見わたせる。

あたしたち、みごとな景觀に、しばらく見とれてた。

「おなか、すいたわよね」

しばらくの沈黙のあと、エリコがとーとつに、いった。

すかないわ、といたかったけれど、ムリ。あたしも、ハラペコだった。それに、乗るまえに見たあの豪華な食堂車で、なにが出されるのか、きょうみしんしんだった。エリコがまた、ム力つくことをいう、

「ねえ、あんたたちって、どーして、そんなふうに行動力がないのかしら。」

わたし、いくわよ。さあ、ミーシャ、ぼさつとしてんじやないわよ。あんたはね、そーだから、みんな、ム力つくのよ」

それ、おまえだ、つーの。

窓の外を見ていたANKAが、

「そうね、そろそろ食事の時刻だね。いこうか」

「とーぜんね」

エリコが勝ちほこったように胸をはって、コンパートメントを出る。はあ……。ミーシャがあわてて、立ち上がり、

「あ、待ってよ、おいてかないで」

ったく……

ANKAも、席を立つ。

「さ、いこうよ、ユリイカ」

「しかたないわね」

といった瞬間、おながグーと鳴った。ANKA、大笑い。あたし、じぶんの腹に、ちよーム力つく。鳴るのは、アンタのかったけど、なにも、このタイミングじゃなくなつて、いいじゃない。なんで、あたしに、恥かかせるのよーっ！。

「なによ、ちがうわよ、これは、オナラよ」

「あんた、それ、ぜんぜん、フォローになってないよ」

「だよね」

あたしたち、笑いながらコンパートメントを出た。そのとたん、あたしを見ていたANKAの笑顔がきびしい表情に変わる。

「な、なによ、ANKA」

あたし、そういうながら、ANKAの視線があたしをとおり越し

ていることに気がついた。うしろをふり返る。

「え？」

だれかが車両しやりようの、いちばん、はしつこのコンパートメントから、こつちを見ていた。部屋へやから顔かおだけ出だしているのだが、みように陰かげになつて、どんな顔かおか、どんな表情ひようじようなのか、よく見えない。

しかも、あたしがふりむいたとたん、さつと身みをひいて、部屋へやのなかにかくれたのだ。

「な、なによ？ キモいわねー、どーゆーこと？」

あたし、なんか、ムカついてツカツカと、じぶんでも意識いしきせずに、その方向ほうこうへと歩いてあるいた。なんで、こんなにムカつくんだろ？ って、こころのどこかでおもいながら……

「待ちなさい、ユリイカ！」

けど、あたし、止とまることができなかった。

ANKAがあたしの肩かたをつかんだときには、もう、あたし、車両しやりようのはしつこまで来きていて、そのコンパートメントのドアのノブをにぎっていた。

「ユリイカ、ちよつと、待つて！」

あたし、ひきあげた。見た瞬間み しゆんかん、背筋せすじに寒気さむけが走るはし。

からっぽ。だれもいない。そんな……。まぢこわい。

ANKAも、同じきぶんだったみたいだ。息いきを吸すいこむ音がきこえたあとは、しばらく声こえがしない。

けど、ようやく、

「だれも、いない。でも、たしかに見みえた。ユリイカ、あんたも、見みたでしょう？」

「見たわよ、見たから、ここに来きたんじやない！」

これ、どういうこと？ ANKA！

「わたしにだってわからないわ！ ヒステリックにならないでよ！」
「ヒステリーなんか、なつてないよ、おちついてるわ。変へんなこといわないで。」

かなり、じゆうぶん、すんごく、おちつきはらってるわ！ ふ

「さげないでよ！」

「どこがおちついてんのよ。めーいっぱい、動揺してんじやん。」

それよか、よく見て。だれか、かくれてるか、とか」

あたし、ゾツとして、もういちど、部屋のなかをふり返り、1つ1つ、よく見た。ANKAがいう、

「荷物らしきものもないし、空き部屋だよね、ここつて。気配もないしね。」

あ、待ちなさい、ユリイカ。ロッカーや、クローゼットとかに、かくれてるかもよ。もう、やめなさい。

ともかく、ひきあげよー。

べつに、なんでもないことかもしれないし。

もし、なにかがあるなら、だまってても、つぎのアクションがあるわ」

あたし、それでも、見まわさずに、いらなかった。天井にぶらさがっていかとか：。でも、だれも、いないし、窓から出ていったとは（内からカギがかかっているから）、考えられないし。

「さあ、いこう」

そういったANKAの声と同時に、あたしのケータイが鳴った。ホルダーから外し、耳にあてる。ミーシャの声が、

「どーしたんですかあー？」

「なんでもないよ、いま、いくからさ」

そうこたえてから、歩き出したものの、あたしは、そのコメントメントをふり返る。

なにもない。なんでもない。だれもない。

食堂車に入るには車両のつなぎめをわたるが、つなぎめにありがちな振動や、ゆれなんか、まったくくない。

まず、エントランスがあつた。

シルク織の絨毯をしきつめ、舞台の緞帳みたいなカーテンをつるし、タペストリー、高価な木製家具、漆喰のレリーフ、フレスコ画、数百本のロウソクをともした金製のシャンデリア、「豪華」って言

葉^はそのもの。

金の紐飾^{きん ひもかざ}りに青い制服^{せいふく}のドアボーイが会釈^{えしやく}しながら、櫛^かのドアをあけてくれる。

食堂^{しょくどう}の内装^{ないそう}も、すごく豪華^{ごうか}だった。

「はやく、はやくー」

エリコが手^てをふる。2人^{ふたり}は、もう、坐^{すわ}っていた。

金^{きん}いろの真鍮^{しんちゆう}の傘^{かさ}のついたランプ、窓^{まど}にはベルベットのカーテン、シルクのような光沢^{こうたく}のテーブルクロスに、燭台^{しょくだい}。

キラキラしたグラス、繊細^{せんさい}な図柄^{ずがら}の陶器^{とうき}のお皿^{さら}。

ここに来^くるまでの過酷^{かこく}な環境^{かんきやう}との、あまりのちがいに、またもや、ふしぎな感覚^{かんかく}にとらわれた。

あたし、ちよっと、うっとり。窓^{まど}がわに坐^{すわ}って、外^{そと}をなにげなくながめる。

雪^{ゆき}が降^ふってけど、くもり空^{そら}がさほど暗^{くら}くない。

樹木^{じゅもく}のまったくない、白^{しろ}っぽい灰^{はい}いろの岩^{いわ}があちこちで、むき出した丘^{おか}。雪^{ゆき}は少ししか、つもっていない。その岩^{いわ}がなんか、すごくくつきり、なまなましいくらい、あざやかに見^みえてた。

あたしのむかいに坐^{すわ}るミーシャは、ワクワクしたようすで、さつきから、あちこちを見^みまわし、あきないようだ。

「あったかいショコラ、よく冷^ひえたシールドル、サラダ、スープ、フオアグラ、牛肉^{ぎゅうにく}の骨^{ほね}つきステーキ、トリュフを添^そえて、うーん、キヤビア、チーズ盛り^もあわせ、それからティラミス、えーと」

通路^{つうろ}がわに坐^{すわ}ったエリコがメニュー片手^{かたて}に、しきりに給仕^{きゅうじ}に注文^{ちゅうもん}してる。

ANKAは……

やっぱ、ボーつと、メニュー見^みながら、エリコのむかいに坐^{すわ}って、考^{かんが}えこんでる。

ほかに、お客^{きやく}が3組^{くみ}あった。

2つ^{ふた}のテーブルにわかれて坐^{すわ}ってる5人1組^{にんひとくみ}のグループ。男女^{だんじよふ}2人のグループ、そして、独^{ひとり}りの男^{おとこ}。怪^{あや}しいかなあ。

ANKAがようやく、口をひらき、

「エリコ、ちよつと、ぜいたくすぎない？」

わたしたちのお金^{かね}って、たくさんじゃないわ。

つか、だいたい、あんた、お金ないんでしょ」

「へー、ANKAらしくないこというじゃん。小せえなー。そんなこと、どーにでもなるわ。

すべてはキモチ、意志^{いし}の力^{ちから}よ」

：：らしくないって、今朝^{けさ}、会^あったばっかじゃん。

まぢ、ちよーしいい、こいつ！

ANKAは、そんなの無視^{むし}で、給仕^{ギヤルソン}にむかって、

「シヨコラと、ヤギのチーズでいいわ。ああ、ポークのソーセージなら、安^{やす}くいから、OKよ」

「かつてにしてよ」

エリコが唇^{くちびる}をとがらせる。

あたしは、そのとき、ミーシャがじつと窓^{まど}の外^{そと}見てることに気がついた。あたしも、彼女^{かのじよ}の視線^{しせん}の方向^{ほうこう}を見る。

「あつ」

すぎ去^さる風景^{ふうけい}のなか、雪^{ゆき}の上に男^{おとこ}が立^たった。車両^{しやりよう}のはしで、あたしたちを見ていたあの男^{おとこ}に、ふんいきが似^にている気がした。

「ANKA、ANKA、あれ、あれを見て」

「なによ」

けど、もう、通り^{とお}すぎて、見えなくなっていた。

でも、なんで？ かくれるように見ていたかとおもえば、こんどは、すがたを見^みせるように、立^たっているなんて。

怖^{こわ}がらせようとしてる？：：、それとも、警告^{けいこく}？

でも、ありえない、さつきまで、走^{はし}ってる列車^{れつしゃ}のなかにいたのに、いま、外^{そと}なんて！ あたしのいつてること、おかしくないよね？

なんか：：じぶんの感覚^{かんかく}が信^{しん}じられなくなってくる。でも、見^みたものは、まさしく見たのよ。

「あの男^{おとこ}が、ほら、コンパートメントのところで、あたしたちを見^み

てた、あの男が外に、いま、立ってたのよ！」

ANKAは、身を乗り出して見ようとしたけど、もうおそい。とおすぎて、だめ。

「え、わかんない、見えないよ。」

でも、ユリイカ、あれが男だって、いつ、わかったの？

あときは、シルエットだけで、はつきりしなかったわ。

なんとなく、ふんいきが男っぽかったのは、たしかだけど……」

「さっきのコンパートメントにいたシルエットと同じだったし、いま、見たアバターは、まちがいなく男だったわ」

エリコとミーシャとは、なんのことかわからず、ぽかあーんとしてる。

「あんたたち、いったい、なんの話してんの？」

あたし、事情を説明した。

だまってきいてたエリコが、意外に、しんけんな表情で、

「ふーん。来ンのおせーとおもったら、そーゆーことだったんだ。

でも、現象としては、そんなに、おどろくようなことじゃないよ。

だってさ、そもそも、バーチャルな世界なんだから、わたしたちがほんとーに生きてる現実世界みたいにさー、物理的な制限、つか、限界なんか、ないんだから。

じっさい、なんでも、ありなんだよ。

ただ、じゃーおめーできるのかよ、っていわれちゃうと、ううん、できないよ、つー、こたえしかないんだけどねー」

ANKAも、うなずきながら、

「そう。たいして、ふしぎじゃないわ。

問題は、なんでか、つてことよ。だって、わたしたちに、そんなことして、なんの意味があるの？

ぜんぜん、わかんない。しかも、エリコのいうとおり、あるていど設定をいじることができる者のしわざだわ。

そんなやつがなんで、わたしたちにかまうの？ わかんない。だから、油断ができない」

あたしも、やっぱ、気持ちわるい。

「だよね。」

なんの目的で、あたしたちのまわりに、まわりつくのよ？」

「ねー、もー、そんな話やめよーよ。ごはんおいしくないよー」

ってミーシャ。

たしかに、そうだよ……けど。

あたしたちは、ちよっぴり暗くなって食事を終えた。

少し沈黙。

部屋に帰る空気になったんだけど、なんか、コンパートメントに

もどるのが怖くて、あたし、だれがさきに立つか、ようすをうかがった。

だって、もし、やつがまたいたら、あたし、怖えーよ。

空気をさっして、ANKAが立つ。すると、エリコがいかにも、ぐうぜんのように、わずかにおくれで立ち上がって、

「さあ、いくわよ。あれ、もしかして、なんか、ビビってる？」

あたし、まぢムツとすんだけどー。

エリコが立ち上がると、ミーシャも、自動的に立つ。あたしが、

いちばん、最後になった。

最後って、ちよっと怖い。うしろから襲われたら、無防備じゃん。

お辞儀する給仕をあとにして、あたしたちは食堂車を出た。

客車に入る。

せまい廊下、列車のなかだからしかたない。窓の外は、くもり空

で、暗くなってきた。

まだ、午前10時くらいのはず。さっきまでは、さほど、暗くなかったのに……せまい廊下を、すごく暗く感じる。

列車の走るガタガタした音以外、しずか。あたし、なんども、うしろをふり返った。

ミーシャが、いちばん、安心な位置かも知んない。でも、彼女は、意識してないとおもう。

やっぱ、ムカつくのはエリコだね。んー、なんか、ドキドキし

てきたよお。

あたし、廊下にならぶコンパートメントの扉から、眼が離せない。だって、そのどれかから、やつが出てきそうな気がするから……

「なんか、気持ちわるい空ね」

ミーシャがポツリという。

「あんだ、なにいつてんの、雪、降ってんだもん。くもり空に決まっ
ってんでしょ」

エリコがあざけるけど、ANKAは、

「でも、今朝より、ずいぶん、暗くなってる。たしかに、ぶきみね」

けつきよく、なにごともなく、あたしたちは、コンパートメントに着いた。

ふー。あたし、安堵のため息つく。

となりで、エリコも、同じ吐息をしてた……

「ちよつと、昼寝しよう。わたしとユリイカは、とくに、疲れてい
るし」

だよな……。眠った。いろんな夢見た。吹雪のなか、もうろう
と、歩きつづける夢。いつても、いつても、たどり着けない。泣い
てる夢……。それでも、すごい疲れていて、爆睡だった。

とちゆう、1回起きた。夜になっていた。時計、見たら午後7時。
エリコがミーシャとディナー食べにいくとか、なんとか、いった。

けど、ANKAも、あたしも、眠ってるほうがよかった。あたし、
水飲んでから、また寝て、午前2時、眼がさめた。

わきで、ANKAが眠ってる。あたし、ぞつ、とした。

ゆれる列車のガタガタした音にまざり、廊下を歩く足音がしてい
る。それがあたしたちのコンパートメントのまえで、止まった！

エリコも、ミーシャも、となりのベッドで、熟睡してる。部屋が
まっ暗で、音だけが空間を支配している。

「ANKA！」

あたしは、彼女の耳もとで、ささやいた。けど、起きない。

足音の主は、ふたたび歩き出した。足音はきこえなくなった。

あたし、怖くて、じっとしていたけど、いつのまにか、眠りにおちていた……らしい。

夢を見た。

夢のなかで、12本の大きくて反り上がった牙を持つ白い巨象が、かくやく4人の戦士にかこまれて、ちかづいてくる。紫摩黄金の雲が彼らのまわりをただよう。すごおい……きれい……

あたしは、ガサガサする音で、眼がさめた。

ANKAがしたくをしている。よかった、朝になったんだ。

起き上がると、エリコも、化粧室をかねる洗面室に坐って、みじたくをしている。そのとなりで、ミーシャが歯みがき。

でも、これ、ほんとかしら。だって、なんでもありのバーチャル世界だもの。あたしをだましてないかとか、すぐに変わっちゃうんじゃないか、って、疑っていると、きりが無い。

無情で、鉄みたいな現実のほうで、たよりになる気がしている、いまは。

「おはよ、ANKA」

あたし、言葉を発した。

「あ、起きたね、ユリイカ。だいじょうぶ？」

その一言がうれしい。安心した。急に、周囲のすべてが色彩を帯びて、リアルになる。

「ありがと。だいじょうぶだよ。ANKAは？」

「わたし？ なにいつてんの、もちろんよ。わたしは、だいじょうぶ。決まってるじゃん」

ちよっと、ムカつかせる、その言葉。信じあっている証みたいで、すべてのしんぱいを、ふき飛ばしてくれる。

そして、エリコのちよムカつくセリフが、

「ユリイカ、なにしてんのよ、すぐ、シーレオーノなんだから。

わたし、トロいやつなんか、待ってないよ。もう、ミーシャだけで、じゅーぶん」

「あーっ、どーしてえ？」

わたし、したくしてんじやーん！」

あたし、ホッとした。

さくばん 昨晚の足音のこと、わすれちゃっていたよ。そーよ、わすれちゃだめ。ANKAに話した。

「笑えない話だね。でも、それだけなら、なんでもない話だよ。

まあ、エリコたちには、話さないでおうか。べつに嘘つくわけじゃないし。それでいい？」

もちろん、OKだし。

列車は午前7時48分、駅に着く。大急ぎで荷物をまとめ、あたふたと、ホームに降りた。

あたしたち、小さいから、荷物をはこぶってゆーか、転がってるって感じ。

駅の屋根は鉄骨にガラスがはられている。

天然の光がいっぱいだ。ヨーロッパみたい。

ホームがいくつも、ってゆーか、20か、30くらいあって、列車が續々と到着し、人がゾロゾロと降りて来る。すごく、そうぞうしい。

みんな、アカデミアへむかう、新規登録者ばつかしだった。

こんなに、たくさんいるの？って感じ。

「人気サイトだからね。世界レベルだし。

あんたも、いまぐらいから、世界レベルに接したほうがいいのよ。

どーせなら、最高がいいしょ。

1番じやなきや、ダメな理由がなんでひつよーなの？ 1番をめ

ざさなきや、ビリになるのが現実よ。

ワールドカップ

W杯で、2番めざして戦うとか、そんなビミューな闘いかた、ム

リっしょ lol (大笑: laughing out loud)。

すべて世界レベルをめざすのよ」

ANKAって、まぢすごいよね。あたし、そんなこと1兆分の1ミクロンさえも、考えたことがなかった。

どーして、眼ざめてる人と、そうでない人間とがいるの？ んご

おい不公平だけど、けつきよく、しかたないのよね。ANKAと出会

えて、あたし、幸運なんだ、っておもうほうが精神衛生上、いい。っていつても、こころの底では、不公平とおもう気持ち……消えないよ。

受け容れなきや、ラチがあかないことなんだけど……。

んー、あたし、どーしたらいいの？

なんて、なやんでるヒマもなく、現実に押し流されて、あたしは、ステップ降りてホームに立っていた。

現実には、いつも容赦がない。待ってくれない。即答を求めてくる。ここ、IEですら同じなんだ。

ハデな身なりの男たちが立っていた。

金いろの飾り紐がたくさんついた水いろのサテン地の丈の長いコートを着て、ブロンズの巻き髪のかつら、刺繍のある縹子の靴に絹の靴下、大きなカフス、そんな身なりで、紋章のついた杖をふり、大きな声を出している。

その紋章がアカデミアの聖なる紋章だということは、あとで知った。

クローンみたいに、十数人も立っていて、同じセリフをバラバラに、わめいている。

「こつちだ。

アカデミアにいく新参者！

知の殿堂、叡智の学舎、真実の伝授所なら、こつちだ。

真理を求むる者、ここへ集まれ」

駅舎から、外に出ると、雪がはげしくなっていた。でも、風はなくて、ひたすら深々と降ってる。

大きな噴水のあるロータリーに、数えきれないくらい、たくさん馬車が行き交っていた。あたしたちみたいな、新規登録者を、つぎつぎと乗せて、ロータリーから出ていく。

アカデミアにむかう馬車が連なり、列をなして、とおくまで、えんえんと、つづいていた。いくさきには、古い、陰鬱な、石畳の路がある。シーレオーノは歴史ある街だ。

皇帝シーレイオン13世の、かつての栄耀栄華がしのばれる城壁、鐘楼、天を刺すように、いくつも塔を屹立させている聖堂の屋根、背の高い石造りの建物たち……石葺屋根がならぶ。

しかし、皇帝の鎮座する街であったのは、数百年もむかしのことらしい。

いまは、ただ歴史を誇りするだけの、淋しい、暗鬱な街だった。雪ぐもりがなおさら、そんなふうに見せる。

「寒いね」

ミーシャがいった。

「そうね。いままで列車のなかがあったかかったからね」

ANKAがきょうみなさげに、そうこたえた。

そうだよ、寒いとか、いつてるばあいじゃない。あたしも、微妙に緊張してきた。

馬車に乗る順番を待ったために、あたしたち、ならんだ。列はいくつかあったけど、どれも長い行列になっていた。

「どーにか、なんないのかしら、まぢめんどいわ。ちよー寒いんだけど。」

いつ、乗れんのよ」

エリコがまたムカつくことをいった。あたしたちのまえに、ならんでいた背の高い女の子のグループの1人がふり返って、

「ふ。テメー、ガキかよ」

ぴしやりといった。あたし、びっくりした。その子は、色白で、青く深いまなざしに、血いろの唇をしていた。

「な、なによ、あんたに、関係ないでしょ!」

エリコは、せいっぱい抵抗したけど、相手の迫力に気おされて、いつもの強気がない。

そのほかの4人の女の子たちも、ふりむいた。

「どーした、メアリー、こんなやつ、相手にして」

「いわせとけよ、メアリー」

「くだらないことにかかわるな。メアリー」

メアリーとよばれた子も、鼻でせせら笑いながら、
「ふっ。そーだね。あたしも、どうかしていたよ、ジン。こんなチ
ビにムカつくなんてね」

いーえ、どうかしてないわ、メアリーさん。エリコは、人をムカ
つかせる天才なのよね。

「背は関係ないわ。あんた、なによ、エラソーに、デカけりやいい
ってもんじゃないわよ」

「プっ」

そう鼻を鳴らして笑うだけで、女の子たちは、もう、むき直って
無視してる。

「ちよっと、ちよっと、なによ、その態度わあ、ちゃんと話しな
さい。

ビビってんの？」

こんどは、ジンとよばれた、鬚のような金髪の子が首だけ
ひねり、こちらを見て、カラカラ笑った。

「ムキになるなよ、おチビちゃん。弱い犬ほど、よく吠えるって
いぜ」

「キーツ」

犬っつーか、猿？

エリコは、味方を求めて、ANKAのほうをむくけど、彼女だっ
て、あきれて肩をすくめるだけ。そりやそーよね。

ただ、いちどだけ、ジンとANKAの眼と眼があった。凍りつく
ような、しずかな火花みたいなものを感じただけど、なんなの、
これって……

つくったような冷笑をジンが泛かべ、さげすむように眼をそらす。
ジンの仲間たちも、それにあわせて、よゆうを見せつけようとする
かのように、不自然に、くすくす笑ってみせる。

しかし、すぐに沈黙。

やっと、馬車が来て、ジンたちが乗りこむと、あたし、すぐ、A
NK Aにきく、

「ねえ、知りあい、もしかして」

ANKAが眼でジンの乗った馬車を追いながら、

「ジン・メタルハート。MUD（マルチ・ユーザー・ダンジョン）の世界じゃあ、けっこう、有名なやつ。

あとの4人は四天王、つてとこね。

なんどか、よそのゲームですれちがったわ。それだけよ」

ミーシャがたまらずいう、

「ねえ、馬車、来ちゃってるけどおー」

エリコが声を上げ、

「えー、あいつが、そーなの？

なによー、たいしたことないじゃん！」

おめーもな。

でも、ジンのこと、知ってたんだあ。あたしだけかよ？ ぜんぜん、知んナイ。

「ミーシャ、知ってた？」

「んーん」

首をよこにふる。あー、よかった。これで、よし。

あたしたち、協力しあって、荷物を後部の台にのせた。んしよ、んしよ。ランプがゆれる。

獣脂を燃やす吊るしランプ。独特のにおい。

かぼそいステップを上がり、豪華な飾りつきの扉から入ると、ギヤザーの入った革張りのシート。ふれてみた。きめこまかくて、しなやか。

じよ、上質だー。

すげー、いーじゃん。

馭者が鞭をふると、4頭の馬が蹄を鳴らして、ゆっくりと、すすみはじめた。

ほかの列から、馬車がつぎつぎ出発しているので、ジンたちの乗った馬車は、すでに、見えなくなっていた。

あたしたちがいくのは、古い街の、さびしげな石畳のメイン・ス

トリート。

過去の栄光をしのばせる石造りの建物は、たくさんの彫刻で飾られ、円柱にささえられたアーチ形のステンドグラスの窓を、いくつも身にまとい、破風に浮彫りや、モザイクを奢っている。

ひろい歩道には、街灯がならび、歩く人たちは、優雅なコートを着ていた。

けど、あたしには、ほそい路地にいる物乞いの人たちや、酒を飲んで酔っぱらい、道ばたで眠っている人たちのほうが眼についた。

ANKAも、つぶやく。

「おかしいね。IEには、物乞いなんかいないはずよ。」

コスプレかしら。慈善や奉仕は、なによりも、クドク・アップに、ひつようだから、いるはずがないわ。それに」

「なに？」

「見て、あれ。証券会社よ。人が集まって、さかんにしゃべっているでしょ。」

あの銀行も見て。為替レートが表示されてるわ。

公会堂の看板には、競売の予定日が掲出されてる。

金銭や財産への執着はマイナス・ポイントなのに、こんなはずがない。

なにか、おかしいよ」

「でも、あたしらの現実世界では、たぶん、ふつうだよね？」

「現実の世界は、くさってるからね。」

力の争いだけがあつて、なんの倫理もない世界。

モラルになんの関係もなく、ただ、ただ、原因が結果を生むだけ。

なんの規制もなく、金銭とか、即物的な原理がはばきかせていて、強い者が勝ち、したたかな人たちがトクをする、ただ、それだけのくだらない世界。

それなのに、わたしたちに、いい子になれよ、とかいうんだから、おとな大人って、みんな、あたまおかしいでしょ。イミわかんないよね(笑)。いい子になってほしきや、金権政治家や指定暴力団や天下り役人

を全員処分して、オレオレ詐欺とか、みんな死刑にしなきゃ、ナツ
トクできないでしょ。

大人が拝金主義者だから、こどもが「年寄りから、ハンドバッグ
ひったくったって、いいじゃん。金儲かるんだからさー」的な感覚に
なっちゃうんだわ。

わたしたち、大人と、いっしょに、やってたんじゃ、正しくも、
しあわせにも、ぜったい、なれないのよ」

「けど、どーしたんだろ。作者の気が変わった、ってこと？」

「そんなの信じらんない」

「でも」

エリコがわって入ってくる。

「あーら、知んなかったの？　ここじゃ、これがさいきんのモード
らしいわよ。どっかのスレッドにも、あったわ」

ミーシャが変な顔をする。

「えー、それじゃあ、こまるうー。わたしでも、たのしく生きてい
けるとこだと、おもってたのにいー」

ANKAが手をふった。

「いいわ、ともかく、ようすを見ましよう。

でも、ほんとに、変わったんだとすれば、モードなんてレベルの
問題じゃないわ。

ミーシャのいうとおりよね。来た意味がなくなる。根本的な問題
だわ」

メイン・ストリートをぬけて、街はずれに來ると、城壁と、門が
見えはじめる。燦然たる紋章が城塞都市の門の、アーチの頂点に、
はめこまれていた。

蛇体の龍を2匹巻きつけた鷲がシレーオーノの街を象徴する
紋らしい。見上げれば、舞いおちる雪が幻想的なきぶんにさせる。
無口になった。

ANKAも、なにか考えこんでいるけど、なに考えてるかは、
わからない。いわないし。

「やっぱさあ、なんか、旅愁りよしゆうかん感じるよねー」

エリコがきどって、そういった。

「ロマンチックみたい」

ミーシャは、うっとりしてる。

門衛もんゑいの兵へいの立つ、門もんを出た。

石畳いしだたみの街道かいどうになっている。

さびしい風景ふうけいだった。ただ、灰はいいろの空そらと、降ふる雪ゆき。

白い丘陵地帯きゅうりょうちたいへつづく、古い石の道いし みち。とおくに見えていた山々やまやまが

少しすこずつだけど、ちかづく。

しばらく、ゆられてすすむと、あたし、眠ねむくなってきた。ウトウ

トしてると、だんだん、樫かしや杉すぎ、ブナや楠くすがふえ、大木たいぼくがたくさん

そびえて、陰かげをなす森もりに入る。

木の幹みきの苔こけが老人ろうじんの鬚ひげのようだった。

積雪せきせつの気候きこうなのに、深い苔ふか こけがあるなんて、ぜんぜん、あってない。

ふしぎな森もりだ…

とうとつに、数十メートルあとから、悲鳴ひめいや、怒号どごうがきこえた。

馬車ばしやを牽ひく馬うまの、おびえた鳴き声がする。護衛ごゑいのアカデミア騎士きし

が剣けんをふるう音おと。

なに者ものかが馬車ばしやの列れつを襲おそってる？

あたし、あらわれたやつらのすがたを見て、鳥肌とりはだが立たった。

裸はだかにちかいからだで、体毛たいもうの長い、ゴリラみたいな怪物かいぶつの集団しゅうだんが

コン棒ぼうや、斧おのや、大剣だいけんを持って、あばれている。

寒さむくないのか？って、シなこと、ゆーてるばやいじゃない！

エリコがさけぶ、

「オークだわ！」

「おーく？」

あたし、きいちゃった。ミーシャも、

「えー、えー、こわいよおー。」

で、オークって、なに？」

ANKAがこたえる、

「怪物よ、鬼みたいなものね」

そうなんだ、あ、あー、あーっ、来るよ。

「あ、来る、ありえねー」

エリコがふたたびさけぶ。

あたしたちのちかくでも、護衛の騎士が剣をぬき、騎馬のたてがみをなびかせ、いなかせる。

すると、両わきからも、とつじよ、わいたようにオークの一団があらわれた。不意を突かれた騎士たち、つぎつぎと馬から、ひきずりおろされる。

「どーしよー、まちやばいー」

あたしも、あせつてさけぶ。

その瞬間、1人の少女があたしたちのまえの馬車から、飛び出して来て、あつ、というまに、5匹のオークを斬りたおした。そのはやさ、運動能力、超絶すごい。

稲妻みたいだった。

剣が氷河の奥の碧い燐火のように滾り、蒼い軌跡を遺す。

少女は、怪物が水平にふった剣を、身体を空中で寝かせてかわし、その状態でバットをスイングするように、剣をふりおろして、オークをあたまから、両断する。

身をひるがえして、大きな剣をたくみにふり上げ、こんどは、股から、あたままを裂く。血の噴水が雪をそめる。

バトル系ゲームの天才じゃないかしら！

少女は、長身で、ストレートの黒髪。両頬に唐獅子の刺青がある。でも、やっぱ、眼につくのは、剣の大きさだ。

はばがひろくて、文様が彫られ、長さが彼女の背丈を超えている。これって、現実じゃ、ありえない。現実なら、ふりまわせるはずがない。

彼女は、ひるんだオークを冷徹な、へいぜんとしたまなざしで、睥睨している。

形勢は逆転し、騎士がつぎつぎ立ち上がって、ひるんだオークた

ちを、片つぱしから斬殺する。

卑怯で、名誉心のカケラもない怪物たちは、劣勢になると、たおれた仲間を見捨てて、逃げ出した。

ようやく、平和がもどり、馬車からひきずりおろされた数人の少年少女たちが蒼白な顔で、よろよろと、立ち上がりはじめる。

1人の少年がたおれたままだった。

ANKAが駆けつけたけど、

「だめ、死んでるわ」

亡骸が……消えた。

ゲーム・オーバー。よかった、ユーザーがあきらめて消したんだ。

つまり、無事ってこと。

だって、バーチャル体験って、ショックが強すぎると死ぬことも、あるんでしょ？

じぶんで消したんだから、ユーザーは、無事なのよね？

エリコが息を呑み、

「うっそー、信じらんない。どーして、殺せるのよ！」

黒髪の少女がクールに、

「IEは変わりはじめている。それが作者の意図なのか、どうなのか、わからないけど」

エリコが反論して、

「たとえば、大きな事故だって、よっぽど、大きな罪科がなくっちゃ、死んだりなんか、しないはずよ。」

わたしたち、来たばかりの新規ユーザーに、そんな大きな罪科があるわけない。

ましてや、醜いオークに殺されるような罪なんて、ぜったいに、ないわ」

おまえなら、どーだか。

ANKAがきく、

「あんた、なまえは」

「イース (Iearth QDQ : 7)」

「わたしは、ANKA。また、ぜひ会いたいわ」

なんで、ANKA？ ひつようなキャラは、『平和』よ。

イースが少し恥ずかしそうにあたまをかいて、

「それなんだけど、じつは、ぼくの乗ってる馬車は6人乗っていて、定員オーバーなんだ。」

見たところ、きみらは、4人のようだが」

「よろこんで、迎え入れるわよ、イース。乗って」

ふたたび馬車がうごき出し、あたしは、イースにきく、

「ねー、あんたのキャラは、なに？」

イースが無表情にこたえる、

「『平和』」

あのー、どーして……………

エリコが声を上げる。

「やったー、これで、カンペキだわ」

「すごーい」

ミーシャも、いう。

ANKAが微笑んだ。

「おもったとおりだわ」

へー、さすがあ。ANKA、わかってたんだあ。

エリコがおもしろがっているような眼つきで、あたしの顔をじつと見ていう、

「あんたさー、まさか、わかってなかったんじゃないでしょうね？

なんか、そんな感じねー」

けら笑いしやる。

ちよームカつくんですけどー。まぢ、こいつ、わかってたのかよ。

そんなの、あとからいくらでも、いえるじゃん。なんか、くやしー。

イースがいぶかしげにたずねた。

「すると、きみたちは」

あたしが説明した。

森をぬけて山岳地帯を登る。猛吹雪だった。

時間^{かん}がもどったみたいな感じ。

てか、山^{やま}のほうは、ずうっと、荒^あれつづけてたんだあ。

あたしら^{かえ}がそこにもどって来^きちや^きったってコト？ あちやー。帰^{かえ}って来^きちや^きったんだあー。

まえも、よく見^みえない。窓^{まど}ガラスが急^{きゆう}にくもって、ビュービューあた^{かぜ}ってくる風^{かぜ}のせい^みで、ガタガタ震^{ふる}えてる。

あたし、1列^{れつ}めの窓^{まど}がわ。寒^{さむ}いわ、まち。だって、正面^{しょうめん}も右^{みぎ}もガラス窓^{まど}だし。ううつ。

でも、となりのANKAは、平気^{へいき}みたい。なんで？ それ^{みぎ}はともかく、後部^{こうぶ}シートは、いいよねー。

とくに、まんなかにちやつかり坐^{すわ}ってる、エリコ。

うーん。クドク、クドク。

あたしは、人^{ひと}をいい席^{せき}に坐^{すわ}らせて、クドクをつむのよ。あたし、こっそりケータイでポイント見^みた……

ODD… あれ、変^かわってないや……意外^{いがい}ときびしいかも……

と、独^{ひと}りこころでさわぎつつも、あたし、なんども、くもるガラスをふいて、ふしぎな外^{そと}の景色^{けしき}を見^みた。

寒^{さむ}さも、瞬^{しゆん}間的^{かんてき}にわすれさせてくれる、IEの世界^{せかい}のふしぎな光^{こう}景^{けい}だった。ヨーロッパの山岳^{さんかく}地帯^{ちたい}みたい^{かん}なんだけど、どこかなつかしい感^{かん}じがある。こころの原風景^{げんふうけい}……ってやつ？

すすむうちに、偉容^{いよう}をほこらしげに、天^{てん}にそびやかす、大山脈^{だいさんみやく}が見^みえてきた。

その山脈^{さんみやく}の、山^{やま}の1つに、異様^{いよう}に、とがってそびえる岩山^{いわやま}があつた。その頂上^{ちようじやう}には、とがった建物^{たてもの}の群^むれがあつた。山^{やま}の尖端^{せんたん}の一部^{いちぶ}みたいだ。

それらは聖堂^{せいどう}や、教会^{きやうかい}や、修道院^{しゅうどういん}なんかだった。

中央^{ちゆうおう}にある大聖堂^{だいせいどう}が最^もも高^{たか}く、そこから離^{はな}れるにつれて、低^{ひく}い建物^{たてもの}になつていた。

全体^{ぜんたい}で、1つの剣^{けん}のさきっぽみたい見^みえる。

アカデミアだった。